朝鮮總督府
朝鮮史のしるべ

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

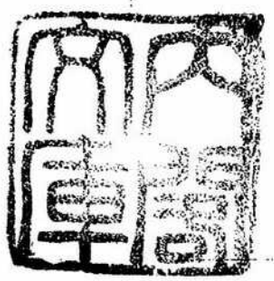
221
24

# 朝鮮史のしるべ

朝鮮總督府

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

内閣文庫
一冊
八一二七二号
和書



# はしがき

この小冊子の初版は我が朝鮮總督府施政二十五周年を機とし、半島の歴史染内書として編纂されたのでありましたが、發刊後意外の需要に接し、三版を重ねることゝなりました。繁簡よろしきを得ないもの、また思ひがけぬ誤り等、なほ保し難いのでありますが、それらの點については、忌憚なき示教を重ねて願ふ次第であります。

昭和十四年八月

朝鮮總督官房文書課長　信　原　聖

# 朝鮮史のしるべ

目　次

一　時代分け……一
二　半島の曙光……五
三　樂浪郡の消長……一〇
四　韓濊の民……一五
五　高句麗の强盛……二
六　百濟・新羅と任那……二六
七　南北對立の形勢……三一
八　新羅の强盛……三八
九　隋唐の來征……四三

一〇　新羅の一統……五一
一一　下代の新羅……五八
一二　高麗の國基……六三
一三　外難と李崔二氏の專權……七〇
一四　江華遷都……七七
一五　元寇と高麗……八三
一六　高麗より李朝へ……九一
一七　南北の二問題……九六
一八　文獻整備……一〇二
一九　佛教と儒教……一一
二〇　朋黨の禍……一一七
二一　文祿慶長の役……一二三



二二　明清の際……一三五
二三　學問の新傾向……一三九
二四　東洋の開港と朝鮮……一四五
二五　統監と總督政治……一五三
參據書目……一五九
索　引……一六一
對照年表……（卷末）



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

## 圖版


一　赴戰高原……一六
二　式占天地盤……一八
三　高句麗人騎馬之圖……二四
四　新羅奉德寺鐘の天女……九八
五　蒙古襲來繪詞の一部……八八
六　東萊釜山浦之圖……一〇〇
七　慶尙北道太白山史庫全景……一〇四
八　李朝の壺……一一三
九　漢江三田渡の碑……一三八
一〇　闕夫之圖(金弘道筆)……一四四




## 附圖


一　三國時代形勢圖……一六
二　新羅一統時代形勢圖……五〇
三　高麗時代形勢圖……八二
四　李朝時代形勢圖……一二八


## 地圖


一　平壤附近……一三
二　扶餘附近……四八
三　慶州附近……五四
四　開城附近……六六
五　京城附近……一四六




アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

表紙繪　松に鶴（李朝初期の象嵌三島瓶より）



# 朝鮮史のしるべ

## 一　時代分け

朝鮮の地を行き、物を見る客は、しばしば「これは李朝時代の遺物です」とか「こは新羅時代には何某と云ふ郡のあつた處です」とかいふ言葉を耳にします。それら李朝時代、新羅時代などの言葉は、申すまでもなく古蹟や遺物の古さを一言のうちに示す非常に便利なものですが、さて朝鮮の歴史には古今を通じていくつの時代があるかと申しますに、大體次の六ッに歸著するでせう。

一　古朝鮮時代
二　樂浪・三韓時代
三　三國時代

### 一　時代分け

四　新羅一統時代
五　高麗時代
六　李朝時代

先づ古朝鮮時代とは支那の歴史でいふ殷の末周の初めの頃に殷の箕子といふ人が來て開いた朝鮮國の時代と前漢の初めに北支那の燕國から亡命して來た衛滿といふ人が前の箕氏の朝鮮に代つて國をたてた時代、即ち衛氏朝鮮の時代と、この二ツの時代を合せ呼ぶ名です。

次の樂浪三韓時代は、右の衛氏朝鮮につぐ時代でありますが、それでも今から二千年も前のことですから、隨分古い話です。正確に云へば前漢の元封三年西暦前一〇八、漢でも外國經略に名高いあの武帝が兵を出して、衛氏の朝鮮を攻め取り、其故地に四ツの郡を置きました。樂浪はその一つで、今の平壤を中心とする地方を占め、他の三つは臨屯、玄菟、眞番といひます。そのうち臨屯、眞番の二郡は、わづか二十五年にして罷められ、間もなく半島内にある郡とし



ては樂浪郡のみとなりました。樂浪が時代の名として呼ばれるのは、さうしたことに基いてゐます。

其後樂浪郡は約四百年間續いて滅びました（西暦三一三）。その滅びる前百年の頃から、郡の南部を分割して、別に帶方と云ふ郡が新しく置かれて居ましたので、この最後の百年間を特に樂浪帶方時代とか樂浪帶方二郡時代とかいふこともあります。

なほ樂浪郡時代とほぼ時を同じうして、郡の南即ち南部朝鮮の地方一帶に韓といふ種族が居り、それは馬韓、辰韓、弁韓の三ツに區別され、總じて三韓といひ、これから三韓時代と云ふ名稱も行はれてゐます。けれどもこれは樂浪郡時代と合せ呼ぶのが便利でせう。

さて樂浪郡を滅ぼしたのは、鴨綠江の上流方面から發展南下して來た高句麗といふ種族です。この高句麗國と、それから郡の滅亡後しばらくして、三韓の地から歴史にあらはれて來る百濟、新羅の二國とを合せて三國と云ひます。

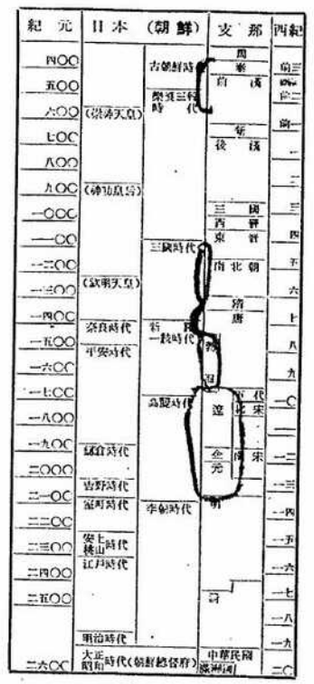
朝鮮史のしるべ

それで三國時代は百濟高句麗二國が唐のために亡ぼされ新羅がひとり半島に君臨するまで續きます。その期間は樂浪郡の滅亡の時から數へると約三百五十年間となるわけです。

其後は比較的單調に時代は移り變りまして新羅一統時代は二百六十餘年、それに續いては王氏の高麗時代が四百六十年最後に李朝時代が五百年續きます。李朝時代とは詳しくいへば李氏朝鮮時代の意味に外なりませんが高麗時代と云ふ呼びかたとのつり合ひを考へれば單に朝鮮時代といつた方が穩當です。然し李朝時代或はただ李朝と云ふ名稱は非常に我我の口耳に慣れた言葉ですからしばらくつり合ひ等は考へないことにして置きませう。

朝鮮歴史の時代分け及びその推移は大略右の通りでありますが更に一層これを明瞭に、そして容易に知るには第一に國史の時代分けとの關連、次には支那の歴史時代との對照を試みるのが便益多いことと思ひます。それを表にしてみると次の樣なものが出來ます。






## 二　半島の曙光

朝鮮歴史の時代分けの最初に置かれる古朝鮮時代はいはば半島文化のあ

けぼのです。文獻上ほのかにも先づ認められるのは、殷末の三仁の一人とされる箕子、あの箕子によつて開かれたといふ朝鮮侯國の時代です。この國は西曆前二世紀の始め頃に亡びました。普通には「箕氏の朝鮮」とも申します。

それにつぐものは、前の箕氏の朝鮮を討ち滅ぼした衛滿といふ人の建てた朝鮮國です。箕子は殷の紂王を諫めて納れられず、東に逃れて朝鮮に來たものと傳へてゐますが、衛滿もまた燕、卽ち北支那の一國からの亡命客で、もと燕王盧綰の臣で、綰は漢室を開いた高祖劉邦を助けて戰功多かつた人ですが、何かのことで、綰が漢室に反して北方、匈奴に逃れ入りますと、滿は朝鮮侯國に亡命して來ました。時の朝鮮國王の名は準といひます。滿は準に信用篤く、要職を授けられましたが、間もなく謀叛の心を起して、遂にその國を奪ひ自から王となつたのです。この「衛氏の朝鮮」は三代百年足らずで、漢の武帝の兵によつて亡ぼされました。さきの「箕氏の朝鮮」とこの「衛氏の朝鮮」とを合せて「古朝鮮」といひ、これにつぐ時代が卽ち樂浪三韓時代です。



古朝鮮時代の中心は、後に樂浪郡の中心となる今の平壤の地方に在つたやうで、何と申しても朝鮮文化の曙光は、大同江畔にさしそめたといふべきでせう。さうして、その近隣に住み、箕氏、衛氏の朝鮮國と多少の關係を持ち、その文化の曙光に浴したものに、眞番臨屯などの名を持つ部族、またやや廣い意味で「濊」とか「貊」とかいふ種族が知られて居ます。特に重要なことは、衛氏の朝鮮の亡びる二十年程前のこと、西曆前一二八頃、夷の濊君南閭といふものが、部下二十八萬人を以て漢に降り、漢はここに滄海郡といふ郡を新設しました。この郡は明確な位地もわからず、また纔かに三年にして罷められたのですが、南閭は「東夷濊君」とありますから、朝鮮方面の或る部族の酋長に相違なく、そこに樂浪等の四郡にさきがけて郡が置かれたといふことは、漢の政治が直接この地方に及ぶことに外なりませんから、餘程重大な歷史的意義を認めなければならぬ事件です。とにかくさういふ經過をふんで樂浪郡時代に入るのですが、樂浪郡の成立を申す前に、今少しこの時代のことをつけ加へて置かねばなり

## 二　半島の曙光

ません。

樂浪郡設置以前の朝鮮については、文獻によつて申せば結局右の樣に、半島に於ける支那民族の事蹟を語るに終らねばなりませんが、一體半島土著の諸種族の中に、漢民族の郡が置かれたといふ右の樣な經過はこれをものについていへば、所謂石器時代の生活に、金屬器が輸入されることになります。それで文獻から離れて樂浪郡以前のことを考へるとすれば、それは當時半島の住民が殘した遺物と遺蹟について調べること、具體的にいへば朝鮮の所謂石器時代の遺物遺蹟を尋ねることです。一概に石器時代といつても、その時間的範圍は極めて長く、進歩の程度は地域によつて差異あるものですから、勿論はつきりしたことは分りませんが、石器時代でも最も古いとされる時期の遺蹟、遺物についていへば、それは大體内地及び滿洲のそれと類似して、而もその分布狀態は、半島全體にあまねく亙つて居ります。日本海黃海の東西兩沿岸地や鴨綠江、豆滿江をはじめとして、大同江、漢江、洛東江等の大河川の兩岸に著し



く濃密な分布を見るのは當然でありますが、そのほか海岸河流を離れた丘陵、山頂にも住居址が認められ、多量の遺物が發見されるのは、朝鮮滿洲等の特異な點で、普通に大陸的特殊性といはれて居ります。

さてかかる遺物遺蹟を殘した半島土著種族が、北支那方面からの流移の漢人種を迎へ、これと接觸したことは、もいの上にもその痕蹟を殘して居ります。先づ明刀錢、安陽布錢など、支那の戰國時代の鑄貨をはじめ、銅劍、鐵鉞、其他數種の秦漢時代の金屬製品が、樂浪郡時代の先驅をなす時代の主要な遺物として土中から發見報告されてゐます。その出土地を列擧しますと、平完北道では渭原郡崇正面龍淵洞、昌城郡東倉面大楡洞、寧遠郡南薪峴面都館洞、平安南道では寧遠郡溫和面溫陽里、全羅南道では務安郡及び濟州島山地港、慶尙南道では金海郡金海面會峴里が知られてゐます。これらの地點を地圖に記入してみれば、北の方では漢人種流入の經路、乃至古代の鮮滿交通路が暗示され、また南の方では海岸地方が最も早く漢文化に接したであらうことが推定されるで

せう。

金屬製品の流入は單なる流入に止まらず、石器時代の土著人に使用利用せられる樣になること申すまでもありません。その進歩はまた遺蹟によつて立證され、石器と金屬器とが並び存して發見される所謂金石併用時代が來ます。平安南北道及び黃海道が最も早くこの新時代に入つたと認められることは、さきの古朝鮮時代が、大同江畔を中心としたといふ文獻上の推定と大體一致してゐます。この傾向は樂浪郡の設置を待つて、愈〻發展を見せるのであります。

## 三　樂浪郡の消長

滄海郡は樂浪等の四郡の前驅をなすものとして注意され、且つそれは四郡の置かれる二十年程前に、やはり武帝によつて置かれ、三年にして罷められた



はかないものでしたが、その置かれた動機は、さきに申した箕君南問の投降のみに在るものではありません。やはりその一面に漢の財政經濟的發展といふことが考へられます。三年にして罷めたのも、亦た主として漢の緊縮政策にもとづくもののやうです。

武帝はこの滄海郡について、貴い經驗を持つて居りますが、衛氏朝鮮の暴慢、甚だしかつたので、遂に元封二年西曆前一〇九秋、海陸から將兵を遣して朝鮮王の都、卽ち王險城今の平壤を伐たしめ、翌年の夏に至つて漸くこれを平げ、その地を中心として、樂浪郡以下眞番臨屯玄菟の四郡を置きました。眞番臨屯は從來知られてゐた部族の名をそのまま採つて郡の名としたものです。

四郡の大體の位地は、樂浪郡は大同江を中心として、平安道黃海道から京畿にも及び、眞番郡は忠淸道全羅道方面、臨屯郡は江原道、玄菟郡は咸鏡道方面と考へられます。但し眞番郡については、これと全く反對に、樂浪郡の北卽ち鴨綠江の上流、長白山の西南麓、今の滿洲國の奉天、安東兩省の東北地方とする說

朝鮮史のしるべ

もあります。この四郡の設置が、餘りに廣範圍にわたり實情にそぐはなかつたと思はれるのは、設置後二十六年にして、早くも大縮少が行はれ、眞番臨屯の二郡は捨てられ更について玄菟郡もその大部分を放棄し、一部を樂浪郡に併せて、玄菟郡の治所は鴨綠江北に移し置かれるに至りました。

それでこれから後は、半島に在る漢の郡としては、樂浪郡のみとなり、以後二百八十餘年を經過した後、漢の末期(西暦二〇四頃)に至つて、樂浪郡の南部を分割して帶方郡が新設され、再び二郡の時代となりましたが、この二郡も百年餘りして西晉の末頃に滅び、ここに半島に於ける、支那の郡縣時代は終ります。

以上の經過を簡單に示すと、次のやうになります。

樂浪眞番臨屯玄菟四郡時代　二六年(西暦前一〇八―八二)

樂浪郡時代　約二八〇年(西暦前八二―後二〇四頃)

樂浪帶方二郡時代　約一〇〇年(西暦二〇四頃―三一三)

この間に於ける郡縣の大勢は、物質的方面に於ては、今日平壌郊外の當時樂

かれた古墳等から出土する遺物によつても推知される如く華やかなものもあつたでせうが、政治方面では必しもさうでありませんでした。それを單的に示すものは、四郡創置後百十年頃の記錄と考へられる前漢書地理志、其後更に百四十年を經た頃の記錄とされる後漢書郡國志、また滅亡直前の頃の記錄と考へられる晉書地理志の戸・口・縣數を一見することです。

| | 戸 | 口 | 縣 |
|---|---|---|---|
| (前漢書地理志) 樂浪郡 | 六二、八一二戸 | 四〇六、七四八口 | 二五縣 |
| (後漢書郡國志) 樂浪郡 | 六一、四九二戸 | 二五七、〇五〇口 | 一八城 |
| (晉書地理志) 樂浪郡 | 三、七〇〇戸 | | 六縣 |
| 帶方郡 | 四、九〇〇戸 | | 七縣 |

さて郡縣政治の對象となつたものは、先づ周の末以降流亡移住し來つた漢人の子孫、次に半島土著の諸種族でありましたが、特に數の上では後者半島土著の人民であつたことはいふまでもありません。故に郡縣の縮少は、土著人民の强盛反抗等に因ることすくなからず、最後に郡縣の滅亡したことは、支那

の國勢が衰へて、統治の力がこの方面に及び難くなつたに基くものでありませうが、同時にそれは土著人民の抵抗とも考へられます。さすれば創設當時を最盛期として、帶後下り阪をたどる樂浪郡の運命は謂はば漢人と土著人との鬪爭の時代であつたわけです。その中で、さきに申した帶方郡の設置は、郡縣政治一旦の更新を意味するものであります。

帶方の名は樂浪郡の中の一縣名として最初から見えます。後漢の終り近い頃には、その帶方縣附近一帶＝樂浪郡の南部數縣は韓種諸種の土著人によつて侵略されてゐましたが、遼東方面に獨立勢力を樹立した公孫氏が、樂浪郡をその配下に置くに至つて、郡の勢力を回復せんがため、樂浪郡から切りはなつて一郡とした時に、舊縣名の一つを採つて新郡の名としたものです。この更張によつて、半島南部の土著人は、また新たなる關係を郡縣と結び、更に海を越えた我が國の西邊地方と郡縣との交渉も活潑に趨きました。韓種族については、帶方郡設置以後のことがやや知られて居り、帶方の故地を併せたのは



この韓種族で、北方樂浪郡の本據を討つたのは、高句麗種族でありました。

## 四　韓・濊の民

樂浪郡の南境、半島南部の地域は「韓地」として古くから、文獻にあらはれて居り、韓地とは、韓人、韓種族居住の地といふ意味と思はれます。衛滿が箕子の後の朝鮮王を攻めたとき、王は左右とともに逃れて韓地に入り、自から韓王と號したといふ傳へがあり、衛氏の朝鮮の時代にも、その重臣の、韓地に入るものあつたといはれてゐます。後漢の末葉帶方郡が新設された頃、この韓種は馬韓、辰韓、弁韓の三ッに分れ、馬韓は五十餘國、辰韓は十二國、弁韓も十二國から成り立つて居ました。當時の國は、今の郡位のものと考へられ、それぞれに長帥があり、また辰韓には、辰王といふやや大きな統率者があつたやうですが、而もその辰王の統率範圍が、馬韓にも及んで居たか如何かは不明で、結局三韓のそれ



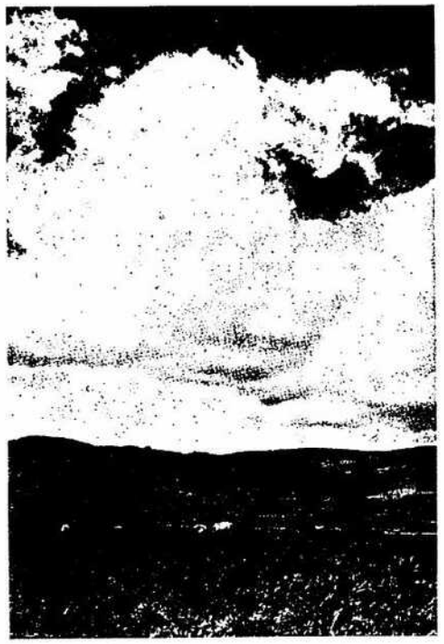


アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

それの統一は極めて微弱であつたといはねばなりません。ただ興味あるまた注意すべきことは、長帥の多くが、支那の官職名を持つて居ることです。それは彼等が四時郡に詣つて朝謁し、毎年の年貢を納め、また臨時事ある時に賦調に應じ、勞役を供給した代償ともいふべきでせう。年貢は農產物を主としたこと、想像に餘りありますが、其他には辰韓の鐵が有名です。

南部朝鮮の韓種族に對して、臨屯郡の故地たる今の江原道地方には、濊種族が居り、玄菟郡の故地たる咸鏡道の方面には、沃沮種族が居りました。何れも韓種族と同じ樣な關係を郡に持つてゐましたが、就中沃沮は、玄菟郡をして江北に移治せしめた程あつて、その實力は強く、その制度にも、支那の古制を存して、根底深いものがありました。これらのことから考へますに、前漢から後漢三國を經て西晉の終り頃まで、卽ち西曆前一世紀から、四百數十年もの長い間、時に盛衰はあつたとはいへ、とにかく半島に支那の郡縣が存續したことは、すばらしい事實で、地域を主體としていへば當時の半島、少くとも郡や縣の所在





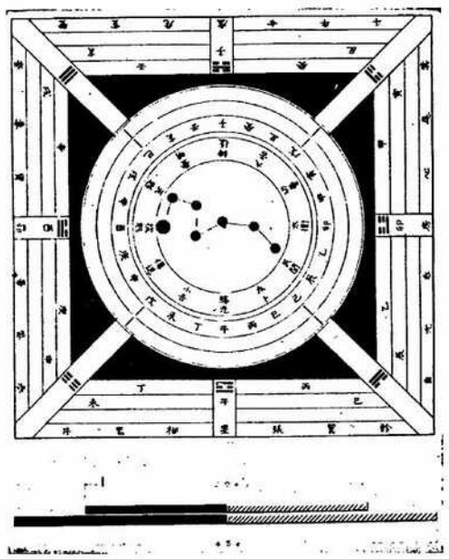
赴戰高原（古の沃沮道）

地は漢魏晉の文化を移して、一時の開化を現出したでせうが、而もそれは郡縣が存續する限りの、開化であり、郡縣が所有した開化であつて、一朝郡縣の滅亡が到來すると、その文化の大部分は消失するのです。新來の漢文化は、半島土著種族のそれに比すれば質に雲壤もただならぬ差違あるものでありました、故に新文化が在來の地方文化の進歩發展の資材とされるには餘りに縁遠くかけはなれたものであり、土著人はそれを吸收咀嚼する能力を充分持ち合せなかつたとせねばなりません。かくてその地に芽生へぬ文化のはかなさは、如何することも出來せません。

然しまた四、百年の郡縣政治が一朝にしてあとかたもなく消え失せ、何等の影響感化をも後に殘さぬといふことは、勿論あり得ないことであつて、事實幾多の遺產が認められるのです。物質生活の方面に於て、金屬器の使用が傳派された如きは、最も大きなことでありますが、特にここに第一の遺產として擧げねばならぬものは政治の方法を敎へたといふことでせう。政治の方法は、

具體的にいへば年貢の取り立てです。土著種族も自然に政治社會を建設するに至ることは像期し得ますが半島の場合は未だその發達が熟さないうちに早くも高度な支配の形式が行はれ土著人は直接間接にその配下に立ち、各國卽ち各部落の長帥は郡縣一種の官吏のつとめを持つに至りました故にかの韓地濊地の長帥の權力はとみに長足の發展をなしたと考へられます。郡縣滅亡の後はそれら強大の長帥自らが支配する社會となつたことは當然です。後節で申しますが新羅百濟の二國は要するに馬韓辰韓の諸國を統一して最後の勝利を獲た二つの力の具體的なあらはれに外なりません。このほか思想信仰方面にもすくなからず影響感化を與へたでありませうがそれについては先年樂浪古墳から再度も出土した式占天地盤がいたく識者の注意をひいたことでした。天圓地方をかたどる二枚の板を各々中心で重ねて上の圓盤には北斗七星十二月神名十干十二支などを記入し下の方盤には八卦十干二十八宿などを配例していろいろな占ひをするに用ひた道具です。支那





樂浪出土の式占天地盤（復原圖）

思想の傳來としては、やはりこの種の陰陽五行に關するものと、さうして農業に關係あるものが最も早かつたらうと思はれます。

次ぎに合せ考ふべきは韓地と一衣帶水をへだてた我が國と樂浪帶方二郡との關係です。我が國人の半島進出、乃至半島渡海のことは、我が神話古傳說によつても、その淵源の遠く且つ古いことが知られますが、それは樂浪郡に關する支那の文獻によつても明確に跡づけられます。しかもそれは樂浪郡との通交にとどまらず、更に航路を延ばして、支那本國との通交をも始めて居りその最も古い事件としては、後漢のはじめ、建武中元二年(西曆五七)我が使者が漢土に遣はされてゐます。帶方郡の置かれた後には、この郡を經由して支那本國に通交しました。特に有名な倭王卑彌呼の時代は支那では魏吳蜀三國鼎立時代で、北支那を治めてゐた魏は、數回帶方郡から使を我が國に遣はしてゐます。然るに建武中元二年以來幾度かの支那通交は、西晉のはじめ、泰始二年(西曆二六六)に至つて中絶しました。もしもこの間の通交が半島の郡を經

由して行はれたもの、連年の郡との通交の延長と想定出來るとすれば、ここに至つて中絶したことにもまた半島の事情の變化が少くとも一面の理由と考へられてよいでせう。半島西海岸の北部に位する樂浪郡、中部に位する帶方郡と通交するには、半島南部を中繼地とせねばなりません。古文獻は、三韓のうちの、今の洛東江江口の地方と推定される弁韓に、我が國の勢力の强固であつた有樣を示して居ります。この弁韓の地こそ國史にいふ任那でありまして、任那の起原は少くとも樂浪郡時代にまで溯ることが出來ます。さすれば我が同人の支那通交の中絶の裏面に、半島の事情の變化を考へるとすれば、さしづめこの最初の中繼地たる弁韓地方、殊くいへば三韓の地の變化が注意されます。上に申しました秦始二年は樂浪帶方二郡の滅亡より五十年程前に當りますが、その頃の特別な事象として、馬韓辰韓の使が支那に入貢し出したことが顧みられます。一體諸韓國人のはじめての支那入朝は秦始二年から五年前魏の景元二年のことで、それまでは帶方樂浪に詣つたに過ぎないので



す。それが景元二年を最初として、其後三十年間(西暦二九〇まで)に十度も馬韓辰韓の朝貢が見えます。これは二郡の實勢力が衰へたことを示すと同時に馬韓辰韓の勃興を物語るものでせう。これを總じて申しますと、諸韓國の勃興は、弁韓に於ける我が勢力を阻害しました、我が國人の帶方通交、從つて支那通交も止み、馬韓辰韓の支那入貢のみが著しくなつたが、それも西暦二九〇年以後は跡を絶ち、かくて二十數年の後ち、西晉の建興元年(西暦三一三)に樂浪郡は高句麗のために滅され、それとともに帶方郡は韓種の領有するところとなりました。これより後ち約八十年間は謂はば半島南部の闕史時代となり、知られるものは、ただ樂浪の故地に據つた高句麗の動きのみであります。

## 五　高句麗の强盛

高句麗は樂浪郡を滅ぼして半島に雄飛する根柢を築きますが、そのここに

至るまでには少くとも三百年の歴史を持つてゐます。高句麗に存した傳說によれば、それは北滿洲の扶餘種族の分れであり明らかに歴史にあらはれる頃には長白山西麓の山地に據つて居りました。恐らく松花江を溯つてここまで南進を續けたものでせう。

前漢の頃、さきに述べました玄菟郡が、今の琿鏡道から鴨綠江の北に移された後ち、その郡治は高句麗縣に在つたといひ、この縣名は高句麗種族と關係あるものと思はれますが、後漢のはじめにはその君長は高句麗王の稱號を漢廷によつて承認され、玄菟郡外に特殊な種族生活をしてゐました。常時には玄菟郡に屬して漢の官服等を受けましたが、然も屢々郡に寇しすんで遼東郡を攻め、遂くは遼河を越えて今の錦州熱河長城地帶にまで兵を出して侵略をほしいままにし、漢兵と戰を交えました。後漢の末、あの帶方郡を新設した公孫氏は、この高句麗にも討伐を行ひ、遂にその本據の地、佟佳江流域を破りました。高句麗はここに中心を南に移して、鴨綠江畔に出で、江の本流とその一支



流通溝河とが形づくる所謂通溝平野に新しき都、丸都城を築きました。丸都城は一名を國内城ともいひ、その故地は今の平安北道滿浦鎭の對岸、滿洲國安東省輯安縣の縣治たる通溝城と、城北三十町餘にある山城子城とに比定され、この附近には當時の築造と考へられる大小の古墳が多數現存し、最近にも壁畫のある優れた古墳が幾多發見されてゐます。後節に述べる好太王碑は通溝の東北一里ばかり、鴨綠江に臨む丘陵に立つてゐます。

公孫氏によつて大打擊を受けた高句麗はここ丸都城に立ちなほつて、なほも玄菟郡を攻め、支那本土では魏、吳、蜀三國の世となつて、北支那の魏が、南支那の吳と相攻めた時代には、公孫氏を中にさしはさんで魏に歡を通じ、同時に使を海路から吳の孫權のもとにも遣して、遠交近攻の政策を自在に發展せしめました。然し魏の景初二年(西暦二三八)公孫氏が遂に魏によつて討滅されてから間もなく、高句麗は愈〻魏の來征を受けることとなります。それは有名な幽州刺史毋丘儉の征伐で、儉は正始五年(西暦二四四)に高句麗の都城を破り

翌年には玄菟太守をして半島に逃入した高句麗王を遠く沃沮の地卽ち今の咸鏡道に追撃せしめ、また樂浪・帶方二郡の太守をして當時高句麗の配下に在つた半島東海岸方面を討平せしめました。この大討伐によつて高句麗に一時影をひそめた形でありましたが、魏・吳共に滅び西晉の時代になりますと、また頭をもたげて、頻に遼東方面に寇します。この頃、西晉の勢力は半島にまでは及び難く、樂浪・帶方二郡は、その最後の日に間近い時で二郡には遼東出身の、張統といふものが擅をとつて、高句麗と相峙して居りましたが、遂に西晉の建興元年西曆三一三、張統は二郡の民を將て遼西に退き、ここに樂浪の故地は全く高句麗の有に歸することになりました。通常、この歳を以て樂浪郡の最後の歳とします。武帝の四郡設置の年から數へて丁度四百二十年を經過してゐます。

かくの如くして高句麗が遂に最後の勝利を得たと云ふことについては、いろいろの原因や理由が考へられませうが、その最も主なものとしては高句麗



の部族組織の強固であつたことを擧げねばなりません。高句麗王の下には登卓各〻等級ある相加・對盧・柿耆・古雛加・主簿・優台・丞・使者・皁衣先人などの官があり、王の宗族は皆な古雛加と申しました。これらの官名は多く高句麗語をそのまゝ漢字で音譯したものと思はれますが、中に主簿とか使者とか、全くの漢語として解釋し得るものも見えるのは、興味ある事實です。貴人卽ち貴族階級とも云ふべきものは涓奴部・絶奴部・順奴部・灌奴部・桂婁部の五ツに分れて居り、高句麗の五族、また五部と云ふのがこれです。もと涓奴部のものが國王となつてゐましたが、丸都に移つた後には桂婁部のものがこれに代りました。そしてそれとともに、從來絶奴部の女と通婚した王は、この頃から灌奴部の女とも通婚するに至つたやうです。卽ち王を出す部族が變り、その通婚部族がまた變つたわけです。何れも各部族間に於ける實力の變化がしからしめたことでせう。凡そそれらのことを以てみれば、丸都に新都を定めたことは、部族組織にも重大な變化をもたらしたといはねばなりません。この種の變化



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

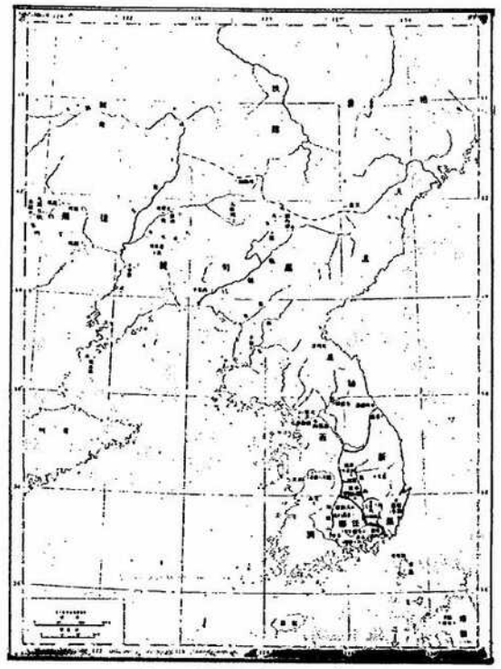
朝鮮史のしるべ

は、高句麗が更に南に下つて大同江畔に遷都した時にも認められます。とにかく丸都城の新營は公孫氏の來征を受けた高句麗の餘儀なさみちであつたでせうが、これによつてその部族の内部は一新され、實力ある部族が主權を執つて次の發展を實現したといふことが出來ませう。丸都に移り國してから凡そ百年にして、高句麗は樂浪郡の攻陷を完了したのです。

## 六　百濟・新羅と任那

樂浪郡が高句麗との抗爭に敗れて南滿洲に退いた歳即ち建興元年よりも三十年ほど前から、南部朝鮮の樣子は全く不明となり、その不明は東晉の咸安二年（西暦三七二）頃まで續きます。この間に於ける高句麗は半島の經略を進めることよりも、遼東方面との交戰に多端でした。それは樂浪郡滅亡後間もなく晉は揚子江南に都を移し、江北即ち北支那は所謂五胡十六國の動亂時代





三國時代形勢圖（西暦四〇〇）

となり、高句麗はその動搖から全く無關係な立場に立ち得なかつたからです。中でも、正始の毋丘儉に討たれた折に劣らぬ痛た手を被つたのは咸康五年から八年(西暦三四二)にわたる慕容氏の來征で、都城は再び陷り王の父の墓はあばかれると云ふ淫刻な有様でありました。然しかうした動亂時代に北支那で敗れたもので高句麗に逃れ入るものの多かつたのは當然で、それら亡命の客が高句麗の政治文化に寄與したことすくなくなかつたであらうといふことも注意する要があります。

さて樂浪帶方二郡は滅び、その故地を領有した高句麗は北方の對策に多忙で南方半島を顧慮する暇なかつた間に、南方の形勢は如何に進んで行つたでせうか。前から申しますやうに、謂はば史時代とも名づくべきこの期間のことですから、はつきりしたことは申されませんが、二郡の最後の頃、しきりに支那本部に通交して活躍を示した馬韓辰韓等の諸韓國では、二郡の滅亡によつて四百年來受けてゐた支那の壓力から漸く解放されて、茲に徐ろにその統

一への歩武をすすめ、遂に百濟・新羅と云ふ新しい二國の成立に到達したと考へねばなりません。この二國は殆んど同時にその名をあらはします。それは東晉の咸安二年(西暦三七二)の頃です。これによつて新羅・百濟の實際上の建國は、如何に新しく考へても、西暦四世紀の中葉以後に置くことは出來ません。新羅及び百濟の、それぞれの傳へでは、その始祖の開國年代は前漢の終り頃(西暦前五七、同一八)として居りますが、それは傳說としてさて措き內外の形勢から大觀すれば、右の如く四世紀の中葉を以て歷史的建國年代とするのが妥當で、百濟では近肖古王、新羅では奈勿王の時代に當ります。

さてこれら二國の出現について考へねばならぬのは我が國との關係です。半島及び大陸に於ける我が國人の動靜は、さきに述べたやうに南鮮の闕史時代に先立つこと約三十年(西暦二六六)以來全く不明となり、東晉の末(西暦四一三)に至つて再び支那通交を開始し、これより後のことはやや知られてゐます。然らばその百五十年間、半島には如何なる關係を持つてゐたかと申しますに、



必ずしも全く半島から手を引いてゐたとなし得ないことは、馬韓に百濟、辰韓に新羅が出現した時、弁韓は駕羅諸國、即ち任那として存續してゐるからであります。さうして任那は我が國の直轄地域であり、新羅・百濟また何れも我が國に臣屬の關係を結んで居ます。これを以てみれば、次のやうなことが言へるでせう。即ち西晉のはじめ頃、諸韓國の勃興によつて、一時半島に於ける我が國の勢力は、阻害されたが、樂浪・帶方二郡滅亡して闕史時代——動搖時代に入ると間もなく、我が國は勢力挽回の大軍を出して、再びもとの權益を弁韓に樹立して任那の振興を企圖し、同時に諸韓國の盛んな統一的傾向にも一矢を報ひて、南鮮＝三韓の地の全體的統一を阻止し、更に新羅・西に百濟の對立を實現したといふことになります。これに任那を加へた三國三地方の分立鼎立の狀態は、二郡衰亡後に於ける諸韓國の統一運動の或る程度までの成就とはいへませうが、而も全く自由なそして順調な進展の結果とは申されません。何故ならば、かかる三分の形勢は、これより百五十年も前の魏の時代に既に大略成

## 六　百濟・新羅と任那

り立つて居り、一世紀半の歴史の推移としては餘りに遲遲とした足どりと思はれるからであります。我が國威の海外發展の最初にして最大のあらはれとして國史に名高い神功皇后の三韓綏撫の御事跡は、右の如き歴史事實を傳へて居ると解すべきではありますまいか。

これを要するに、任那の存立のみならず、百濟新羅二國の成立も、我が國の勢力、我が國の經營に依るところ極めて深刻であつたことは疑ふべからざるところであり、このことは次節に申しますやうに、高句麗が遼東方面へ傾注した力を割いて、南方は半島の經略を開始するに至ると、先づ以て百濟新羅を掩ふ我が國の勢力とぶつつかり、しばらくは高句麗と日本の對立時代を繼續せねばならぬことによつても考へ得ることです。普通に新羅百濟の出現した四世紀中葉を以て、半島の三國時代といひ、さきに時代分けのことを申しました折にも、その通說に依つて置きましたが、事實上の三國鼎立時代は、右の高句麗、日本の二國對立時代の形勢が收まつた後に始まるのであります。



## 七　南北對立の形勢

高句麗と日本と、南北勢力の對立抗爭時代の一大記念碑は、高句麗の古都たる鴨綠江畔通溝城外に乾立する永樂好太王陵碑であります。碑は好太王薨去の翌翌年（西暦四一四）に建立されたものでただ大碑がここに在るといふことだけは朝鮮では五百年も前からすでに知られてゐましたが、その文が讀まれて我が國や支那の學者の研究俎上にのぼつたのは明治十七八年頃で、これによつて半島古代史の研究はとみに光明を與へられました。

碑文は好太王一代の功業を銘記したものですが、その大部分は、王の半島南下の經營に關し、從つて我が國の勢力と高句麗のそれとの角逐が雄大に記されてゐます。王は東晉の太元十六年（西暦三九一）、十八歲の若さを以て登位、元號を建てて永樂元年といひ、治世二十二年にわたる英主であります。その業

蹟は北方は遼東なる燕國の攻勢を阻止しつつ同時に南方に數回の大軍を出して我が國の兵と戰を交へたことに發揮されてゐます。いま碑によつてその南征の跡をたどつてみますとその第一回の出兵は永樂六年に於ける百濟征討第二回は永樂十四年帶方の境に於ける我が兵との海戰です。初回の出兵については、その理由を叙べて「百濟新羅舊是屬民由來朝貢而倭以辛卯年來渡海破百殘□□□羅以爲臣民」といひ王は水軍を將て來り百濟に臨んだのです。この文にいふ辛卯年は西暦三九一年に相當する辛卯卽ち好太王卽位の元年に比定するのが從來の定說でありますが、近頃それよりも更に六十年前の辛卯西暦三三一に當てんとする說もあります。とにかくこの三十數字は直接には百殘(百濟)征討の理由を示すものですが間接には百濟を掩有する我が勢力を驅逐せんとする意向を暗示してゐます。この回王は城を陷るること約五十城大江(漢江)を渡つて百濟の王城京畿道廣州に迫り、百濟王の降服をみました。第二



回の南方巡狩は百濟が背盟して反してゐるのをとがめんがためでありました。この時王の陣營に新羅の使者が來り、我が兵によつて征服されて居る苦痛を訴へて救ひを求めました。これによつて第三回の來征となります。今回は陸路步騎五萬の軍をひつさげて新羅に入り新羅城内に充滿する我が兵を追擊して任那にまで到りました。最後の第四回の海戰は帶方の境卽ち今の京畿黃海道の境上仁川灣沖合ひかと思はれる中部西海岸で行はれてゐます。以上前後四回の出征の記事に、我が兵と無關係に行はれたものが一つもないことは當時我が國の勢力が那邊にまで及んでゐたかを物語つて餘りあります。さうして好太王の南征の最も注意すべき結果は新羅と高句麗との關係が促進されたこと、百濟の漢江流域に於ける勢力衰へて、その南遷の端緒を開いたことなどであります。

好太王の次の長壽王は、その名の示す如く在位七十九年の久しきに及んだ王で、先王の遺志をついでまた專ら南方經略に意を用ひました。王の十五年

に西暦四二七遂に都を丸都から平壤に移したことは、南進の過程として極めて重要な事件です。平壤に都城を築くことは、これより八十五年程前にもあつたやうですが正式の遷都はこの年とすべきでせう。

さて長壽王六十三年の南征によつて百濟は遂に漢江南岸の都城を失ひ、熊津、卽ち今の公州に遷都し、更に六十餘年を經て泗沘、今の扶餘に移り、此地を最後の都とします。故に百濟の歷史は、その都の所在によつて、次の如き三期に分けることが出來ます。

一　漢城時代（廣州）　約一二〇年間　（西暦三五〇頃―四七五）

二　熊津時代（公州）　六三年間　（西暦四七五―五三八）

三　泗沘時代（扶餘）　一二二年間　（西暦五三八―六六〇）

百濟のかかる相つぐ三次の南遷は結局我が國の勢力に影響を及ぼさずにはやみません。國史に、熊津遷都の際のことを叙して、天皇、百濟は高麗の爲めに破られぬと聞しめして、久麻那利（熊津）を以て汝洲王に賜ひて、其の國を救ひ

高句麗人騎馬之圖（古墳壁畫模寫）

興す」とあります。また泗沘遷都より二十年程前には、有名な任那の四縣（上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁）を割き續いて蟾津江流域の己汶（コベン）、帶沙（タイサ）を百濟に與へました。ただここに注意すべきことは、百濟の南遷が、專ら高句麗の南侵を受けての餘儀なき一途であつたとばかりに考へるならば、それは妥當でありません。高句麗の壓迫は、百濟の遷都の外的理由ではありますが、少くとも泗沘遷都については、國都を安全地帶に移して、國の諸般の制度を整へ、文物を豐かにして國勢を回復せんとする積極的意向のあつたことを認めざるを得ないものがあります。それにしても、結果に於いては、我が國はそれがために任那の領域の西部大半を失ふといふことになりました。

百濟の五部五方の制は、上述高句麗の五部の制と甚だ似通ふものとして注意されますが、その實施は、實に最後の扶餘時代に在つたのです。この制によれば、畿内を上・中・下・前・後の五部に分ち、地方を中・東・西・南・北の五方に分ち、方の中心たる方城には方領といふ官を置き、これと同時に貴族は畿内の區劃名と一

致する五部に分たれてゐました。然しこの貴族の部が、高句麗の最初の五部の如き氏族制に起原を有するかどうかは疑問とされてゐます。

次に新羅は百濟と違つて終始その都を遷すことなく、その發祥の地たる今の慶州を守つて、著著國勢の發展をはかつたのです。任那とは極めて近接した位地に在つたので、任那との爭ひは常に切迫した問題として、積極的に推移しました。百濟は常に讓與の形式によつて我が支配下の任那の領域を占有して行つたに對して、新羅は侵略者の惡名を受けながら、順次に任那の諸國を併せ進んだのです。かゝる侵略併合は、新羅法興王代に著しくなり、次の眞興王代に至つて成就しました。西暦五六二年。今度、尙南道昌寧に存する眞興王辛巳西暦五六二の拓殖の碑は、任那經略の一大記念碑ともいひ得るでせう。

かくて任那を滅ぼした張本は新羅となつたのです。西は百濟の南選東は新羅の侵略によつて任那が滅んだといふことは、間接的には、我が國が從來半島に持つて居た實際上の勢力が一時中斷されたことを意味し、高句麗對日本



の南北對立の時代はここに終つて、高句麗、百濟、新羅の三國鼎立時代が成立しました。但しこの時我が國の勢力が全く半島から地を拂つたと考へるならば、大變な誤りで、この後もなほ百濟、新羅は我が國に朝貢の禮をとつてゐます。ただ直接の經營が止んだといふまでです。

ひるがへつて思ひますに、我が兵が好太王と戰を交へた頃から數へると、約百七十年にして任那は滅びました。任那經營の中心たる任那日本府も同時になくなつたわけです。この百七十年ばかりの間に大きくなつた百濟、新羅の動向をみますと、勿論時によつて變化はありますが、百濟は我が國に、そして新羅は內面、高句麗に附庸して、何れも各自の成育をはかるといふのが、大體の筋です。のみならず、當時の各國は、謂はば二重外交とも申すべき對外關係の下に立つて居ります。卽ち百濟は我が國に附庸すると同時に、支那南朝の歷代に通じてその冊封を受け、新羅は高句麗とともに、支那南北兩朝主として北朝に朝貢して居ります。所謂三國鼎立時代の成立は、高句麗、日本、この南北の勢

力の消長のみによるものではなく、更に支那の南北分立の形勢にもよるところ多かつたことを知らねばなりません。

## 八　新羅の強盛

かやうにして成立した三國鼎立時代は、此後約百年間（西暦六六〇年代まで）繼續します。この期間に於ける高句麗は、依然として南下の希望を持續しましたが、好太王や長壽王の時の樣に成功することは出來ませんでした。百濟はさきにも申しました第三次の遷都によつて立ちなほり、その國勢は一時好轉して、逆に攻勢に出でましたが、それよりも主なことは、新羅が強大となり、高句麗から離れて、敵對の態度をとり、百濟と聯合してこれに當るにさへ至つたことであります。

さきに任那の滅亡を以て、三國鼎立時代は成立したと申しましたが、それは



外形的な說明であつて、內部からみれば新羅の强大によつてこの時代は完成したといはねばなりません。新羅は好太王の頃以來、高句麗に附庸した形でありましたが、任那滅亡の前後の頃には、全くその羈絆を脫して、敵對の態度を取るに至りました。高句麗の受けた最も大きな痛手は、眞興王が百濟の聖明王と連合して高句麗を攻めたことです。この時百濟は西岸六郡の地を占領して、今の臨津江畔に及び、新羅は東岸、江原道から咸鏡道にわたる十郡の地を略し、その北端は今の咸鏡北道に達せんとしました。而もその直後、新羅は百濟が占領した西海岸方面をも奪ひ取つて、今の京城附近を中心とする新州を經營しました。有名な眞興王碑のうち三碑は、この當時の意義ある記念碑であります。

一　磨雲嶺碑　咸鏡南道利原郡磨雲嶺所在
二　黃草嶺碑　咸鏡南道咸興郡黃草嶺下所在
三　北漢山碑　京畿道北漢山碑峯所在

磨雲嶺の碑には明らかに大昌元年戊子秋八月云云の文字が認められ、大昌は新羅の建てた年號で、王の二十九年(西暦五六八)に當ります。右の三碑と、さきの昌寧なる辛巳拓疆の碑とを合せて眞興王の四碑といひます。

新羅がかやうに南北に領地を擴め、特に漢江下流域を取つて仁川灣に出で、また洛東江下流域を手中に收めて朝鮮海峽に出ることが出來たのは、新羅の今後の發展に對して最も重大な力となるものでなければなりません。然らば新羅はこの頃になつて如何してかくも目ざましい發展を遂げることが出來たかの點について一考する必要があります。

新羅は半島三國のうち最も南に位し、高句麗・百濟の二國がともに所謂表朝鮮に中心を置いたに反して、新羅の都城は、ひとり脊梁山脈の東、裏朝鮮の南邊に在りました。この位置が新羅の開化發展を遲からしめたことについては、從來何人も言ふことでありますが、而もそれがまた新羅を利して、新羅强盛の原因の一つとなつたことは餘り注意されて居りません。新羅が併合した任



那諸國、卽ち加羅諸國と比べてみますと、それらの多くは洛東江の本流支流が形づくる山間の盆地に在つて發展の餘地に乏しく、稀に江岸近くに據つて交通の利便をはしいままにしたものは、防守に不利を招くといふ有樣であつたに對して、新羅は反對側の日本海に注ぐ兄江流域の平野を根城とし、四周は大小の山岳丘陵にとりかこまれて、外力の防禦に易く、且つそこから外方への交通には、北・西・南と三方に路を持ち、守るに易く攻むるに難き地勢であります。かかる地勢は必然的に部族の血の純潔を保たしめ、團結を堅くし、氏族制度の如きも比較的順調な發達を遂げることが出來ました。かの有名な新羅六部(喙・沙喙・本・彼・習・比・漸・喙・漢・廻)の制の如き、法興・眞興の間に完成したと考へられます。また武勇と節義をもつて誇る花郎の徒の活躍もこれより漸く著しくなります。

次に大陸文化の輸入に於いても、その不便と時間的に遲れたことをいふに止まるのは妥當でありますまい。なるほど新羅は西北は仁川灣に出で、南は朝鮮海峽に達するまでは、多く百濟が高句麗を經由せねばなりませんでし

たから、それらの二國に比して開化は徐徐と進んだのですが、そのために却つて支那文化の過食に陷る危險を少くすることが出來、氏族社會の鞏固な基礎は作られたと思はれます。さうしてその基礎の上に立つて高句麗を攻め、百濟に抗し、また任那を併せ、他方、海口を南と西とに獲得出來たのを一轉期として、支那交通を盛にして、その勢力を迎へ、その文化を輸入して、やがて半島一統に成功するのであります。

以上は、新羅强大のて、般的觀察ですが、それを前提として、更に一歩をすすめ、より具體的な事實を擧げるとすれば、それは佛教の國家的奉行と云ふことです。佛教もまた他の諸文物と同樣、新羅には最も遲く傳來しました。普通に、高句麗には小獸林王の二年(西暦三七二)に、百濟には枕流王の元年(西暦三八四)に始めて傳へられたといはれます。新羅の佛教は、その傳來の年代は新古諸說あつて極めて曖昧ですが、他の二國と違つた點は「佛法肇行」としてそれが國家的にはじめて認められた年がはつきりして居ることであります。それは



法興王の十五年西暦五二八のことです。佛教の傳來は、三國それぞれに、新文化の輸入として重大な影響を及ぼしたに違ひありませんが、わけても、上に申しました如き鞏固な氏族社會を根柢とする新羅にとつては特殊なはたらきをなしたと考へられます。蓋しその當時の新羅は、舊來の新羅ではありません。南北に新領土を擴張して、新附の人民も大勢あつた際です、この新國家の主權者たる新羅王を權威づけるのに、佛教の普遍思想や階級思想が、大いにあづかつて力あつたことは想像に易きところであり、かの眞興王碑に隨駕の人名を列擧して沙門道人を最初に置いてある如きは、興味深いことであります。

## 九　隋・唐の來征

新羅の强盛、百濟の逆襲によつて、高句麗國南の翼は甚だしい打撃を被りました。それに續いて、高句麗をして更に南方を顧みる暇なからしめる事態が

起りました。それは從來二百年南朝北朝と分立して來た支那本部が隋の文帝によつて統一されたことです。

何時の時代でも南滿洲朝鮮即ち支那からいつて東北地方が支那本部の形勢に至大の關係を持つものであることは、こと新しく申すまでもありません。分裂時代には北支那の政權はこの東北地方の綏服を前程とせねばならず統一時代にはまた內外蒙古方面即ち北方勢力の、塞內侵入を牽制する力として、遼東朝鮮方面の歸順を必要とするのです。故に結果からみれば南北統一された支那の政治的勢力は、何れの時代にもこの方面に加へられます。

今、隋が天下を統一するや高句麗が先づその壓迫を感じ、隋に對する防拒の策を講ぜねばならなかつたことは當然です。ましてや隋が南北統一を成就した最も大きな理由としては、その對北方策言ひかへれば當時塞北を被ふた突厥族の勢力を分割せしめることに成功した點が指摘され、而も高句麗はその突厥と相通好した形迹さへ認められるに於てをやであります。



はじめ隋の文帝は、南北統一を成就するや直ちに使を高句麗に遣して藩臣の禮をとらしめ、高句麗はまた陳謝の意を表したのでしたが、開皇十八年(西暦五九八)高句麗が靺鞨の衆を率ゐて遼西を侵しましたので、遂に文帝は水陸三十萬と稱する大兵を出して高句麗を伐たしめました。然し隋の軍は、運糧つづかず、疫病の流行などによつて、遼河附近まで進むことが出來たのみで、甚だ振ひません。たまたま高句麗王の謝罪により、漸く當座の體面を保ち、軍をかへしました。其後六年にして文帝は甚じ、高句麗の問題は未解決のまま煬帝にひきつがれたわけであります。

大業三年(西暦六〇七)煬帝は北方を巡狩し、突厥懷柔策の一端として、長城外その可汗の帳に幸しましたところ、其時はからずも高句麗の使者の其地に在るに際會し、可汗は使者を引いて煬帝に見えました。文帝既に一度兵を出して、勝つこと出來なかつた高句麗が、かねて隋の重要視する突厥に通じて居ることをまのあたり認めた煬帝は、高句麗に對する關心を更に新たにしたに相

違ありません。帝は高句麗の使者に言つて、高句麗王の速かに來り入朝すべきを傳へしめました。然し高句麗王はその命を奉ぜず、煬帝は間もなく高句麗征討の準備を進め、大業八年第一回の攻撃となりました。動員兵數は、百十三萬三千人、これを左右各十二軍に分ち、更に數百艘から成る海軍を加へて居ります。さうして征戰は九年十年と連續三年三回にわたつて行はれたのですが、高句麗はよくこれを防ぎ、煬帝は高句麗をしてまた立つ能はざるまでに戰ひ拔くことは出來ません、高句麗が降を乞ふたのを納れて師を還へすといふ有樣でした。而も隋は、かかる貧弱な結果を獲るまでには、その國運を屠したのであつて、この征戰中、内には群雄蜂起し、外には突厥が再び隋から離反して義寧二年（西暦六一八）早くもその國亡びかくて高句麗問題は次の唐のために殘されたのであります。

唐の世になると、はじめのうちは高句麗も百濟、新羅と同じく使を遣はして朝貢し、その正朔を受けて居りましたが、太宗の貞觀十六年（西暦六四二）に至つ



て、高句麗は百濟と連合して新羅を攻め、その四十餘城を取り、更に新羅の唐に通交する要路、即ち仁川灣を制する地方をも占領せんとしましたので、新羅は急を唐に訴へ救を求めました。この歳また高句麗の大臣泉蓋蘇文がその王を殺したといふ報告あり、唐では直ちに高句麗を攻むべしとの議論が可なり行はれましたが、太宗はこれを止め、先づ使者を高句麗、百濟に遣はして、新羅を攻むることなからしめんとしました。然し高句麗はその命を奉じませんので、遂に出征決行といふことになり、陸兵十萬、船師七萬の大軍が動かされます。貞觀十九年の奉唐軍は高句麗の地に入り、十月には進んで鴨綠江畔の安市城を攻めましたが、遂に克つこと能はずして師を還しました。これを唐の第一回の出征とします。

第二回は貞觀二十一年です。是歳高句麗は王子を遣して入唐謝罪しましたが、唐は翌年更に第三回の軍を出し、この間、百濟はまたも新羅を攻めて十餘城を取りました。かうして所期の半ばも達成出來ぬうちに、太宗は薨じまし

## 九　唐の來征

朝鮮史のしるべ

たので征討のことは一時中絶となります。

太宗についで立つた高宗は、永徽六年から顯慶四年にかけて、また兵を出して高句麗を攻めましたが、容易に效果をあげることは出來ません。そこで顯慶五年、背面攻撃の計を以て先づ百濟を討つことにしました。この歳八月、水陸十萬の軍は、大將軍蘇定方に率ゐられて、海路より錦江江口に至り、溯つて都城扶餘を攻めました。百濟王義慈及び太子隆は北方に逃れて、その城は陷りました。ここに於て義慈等もまた遂に唐軍に降り、蘇定方は兵を留めて鎮守せしめるとともに、義慈以下の俘虜を將て歸國しました。今扶餘の郊外に屹立する大石塔に刻せられた大唐平百濟國碑銘は、この征戰の詳しい記錄の一つであり、また直接の記念であり、塔を利用してその銘を刻したなど、如何にも戰塵のなほ收まらぬ當座の方便として、後人の感慨をそそるものであります。

百濟の討平に勢ひづいた唐は、その翌龍朔元年早々、河南河北以下六十七州に兵を募り、五月には大將軍を任命、秋八月、前年の蘇定方は、遂に鴨綠江を渡る

ことに成功して一舉平壤を圍みました。然るに百濟の遺臣鬼室福信等は故國復興の運動を起し唐の留鎭の兵を危地に陷れましたので唐は高句麗攻擊をまたも一時止め平壤の圍みを解いて還らしめ百濟の動亂を鎭定させることになります。この百濟遺臣等の故國復興の運動は百濟の歷史を飾る最後の華であつて我が國に在つた王子豐璋は迎へられて國に還り、その中心になつたのみでなく、我が國では齊明天皇は皇太子とともに親しく北九州に御幸あらせられ、救援軍を指揮し給ふたのであります。救援軍は錦江口(國史に所謂白村口)に唐軍と戰つて利なく、失敗に歸したのでありますが、勝敗の如何は大なる問題ではありません。根本的問題は出兵救援の精神が那邊にあつたかといふことです。それはその時發せられました大詔に明示されて居るところであつて實に危きを扶け絶えたるを繼がしむると云ふ公明なる皇道の精神にもとづくものでありました。

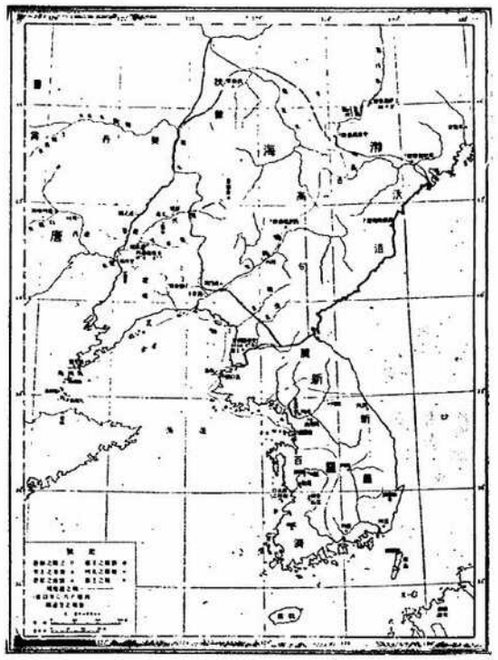
さて福信等の復興運動は、鯨德二年(西曆六六五)に至つて遂に全く失敗に歸

## 九　隋唐の來襲

しましたので、ここに唐は煬乾封元年からは、愈々最後の高句麗攻撃に全力を集中することが出來るやうになり、たまたま高句麗では、さきの泉蓋蘇文死してその子三人の間に内訌を生じたに乘じて兵を進め、煬煬總章元年(西暦六六八)九月、渤の平壤城を拔き、高句麗王高藏以下を俘とすることを得ました。

隋の文帝の出師から數へてここに至るまで約七十年、隋は文帝煬帝、唐は高祖太宗高宗と五代の何れも有名な天子をかへて、高句麗征討の事は成就しそれに先立つては百濟が滅され、ここに新羅の半島一統時代が到來することになり、半島から滿洲にかけて一帶の形勢は一變しました。それは一に高句麗の滅亡に基因することで、極東の形勢は、この時ほど大きな變化を前後に認められないといつても過言ではありません。何故なら樂浪郡時代以來高句麗は、北支那方面に對して絶えず攻勢的態度を以て、遼東から朝鮮半島、また南滿洲にかけての地域を占めて立國し、支那の勢力の東漸に對する一大障壁をなしてゐたので、高句麗はもとより、新羅百濟二國も、支那の諸朝に入朝貢獻の禮





新羅・渤海時代形勢圖(西暦六六八)

をとりつつ、しかも一面、各々自主的精神を失ふことなかつたのですが、この障壁がなくなつてより後もは、政治的に支那に附覊するとともに、またかの精神も次第に消滅して、事大服屬は民性の最も大なる特徴とさへなるに至るのであります。

## 一〇　新羅の一統

隋唐の高句麗征討、それに伴ふ百濟征伐は、さきにも申しました如く、支那本部の統一を安全にするに重要な條件として、多大の犠牲を拂つて遂行されたのでありますが、特に唐の出兵の表面の理由としては、高句麗百濟に侵略された新羅を救援するといふことが可なり重きをなして居ります。故にこの戰役中、新羅は常に唐の側面軍また背面軍としての任務を負擔せしめられ、軍兵の派遣、食糧の供給に、すくなからぬ苦心を嘗めました。高句麗百濟が滅んで、

新羅は自然に半島を一手に收めることが出來ることとなりましたが、それまでに盡した新羅の努力を考へれば、當然の報酬ともいはねばなりません、但しそれは二國の滅亡と同時に實現されたのではなくて、平壤城陷落後、またも百濟の場合と同樣高句麗遺民の反亂起り、その主謀者は來り新羅に投じ、新羅はこれを納れましたので、ここに新羅と唐とは一時敵對關係に立つたのです。これがまた單純に片附かず、唐羅の交戰は南北水陸前後六年にわたつて行はれましたが、唐の對外退嬰政策と新羅の謝罪とによつて解決し、平壤に置かれた安東都護府は遼東に移され、麗濟の故地大半は自然新羅の據有するところとなり、新羅の所謂半島一統が成就しました。時に上元二年、新羅文武王十五年（西曆六七五年）であります。

そもそも新羅は五十六王九百九十二年の王朝といはれますが、古くからこれを三代に分けて上代中代下代と致します。これを表示しますと、

上代　始祖王―眞德王　二十八王　七一二年間



中代　武烈王―惠恭王　八王　一二七年間

下代　宣德王―敬順王　二十王　一五六年間

となり、一統時代は大略その中代と下代とを合せたものに當ります。新羅の極盛期は一統時代の初め約百年間に在り、卽ち中代を終るとともに下り坂をたどる形です。

高句麗百濟の故地を收め、その遺民を新附の民として抱擁安堵せしめたことは、舊來の新羅にとつては、仕那併合につぐ大きな出來ごとで、ここに種族の血は新たにされ、社會組織は擴大强化されたことと思はれます。

他方、唐に對しては、宗主國と仰いで屬國の禮をとり、連年賀正使を遣して朝貢し、留學生、留學僧をも派遣し、國王の卽位や薨去は一一これを告げて唐よりの弔祭使、册封使を迎へました。それとともに我が國にも毎年請政進調の使修好の使ではないを遣すとともに、國王の薨去や卽位を告ぐる使を出し、その臣服の態度は唐に對するのと變りない有樣であり、我が國からもまたそれに





アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

應ずる使者が出されてゐます。

我が神龜三年は新羅の聖德王二十五年に相當します。この年の遣調使は時の左大臣長屋王の佐保山の山莊に招かれて一日の清遊をほしいままにしました。その折に詠じた大學頭以下我が朝臣の詩が十一首ほど我が國最古の漢詩集とされる懷風藻に載せられてゐます。朝廷の公の關係以外にかうした私的な交渉も行はれたことを示す貴重な資料であります。またそれから十年ばかり後の天平八年の遣新羅使阿倍朝臣繼麿呂の一行が旅上に詠じた歌は同じく我が時最古の歌集とされる萬葉集に收められてゐます。

大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば戀ひにけるかも

これは大使が筑紫の鞆亭で詠だ歌です。

彼ふすま新羅へいます君が目を今日か明日かと齋ひて待たん

これはある使者の妻の心を詠んだ歌と考へられます。かかる情趣に富み、また當時の史實を知るたすけとなる歌がすべて百四十五首も殘つてゐる

とは、まことに幸なことです。然しかうした平和な關係はこの後永く續きません。右の和歌を殘した天平の頃から、新羅の我が國に對する臣服の態度は次第に疎遠に趨きました。それで天平勝寶年中、新羅の景德王代我が國は大規模な新羅征伐の計畫を立て著著準備をすすめましたが、遂に實現するには至りませんでした。かくして新羅の正式の使は、惠恭王代を最後として絶えます、

さてその反面、唐との關係は愈々密接を加へて行きます。それは、これまで我が國とは任那以來の關係があり、また一朝唐の來征など大陸の脅威を受けた時は、我が國にたのむところあつたからでありませうが、唐の治世が次第に安定して、その恐れもなくなつた上は、文化の上で恩惠を被ること多い唐へ專ら接近するに至るのは當然なことです。それ以外にも、唐と新羅との關係を一層密接ならしめた外部の事情があります。それは當時滿洲に國を建てて居た渤海國が唐の北邊を窺つたからであります。新羅は、この渤海國を側面

朝鮮史のしるべ

から赤制する役に當りました。然しそのために、新羅は、大同江以南を正式にその領土として唐から與へられました。これによつて、一統時代の新羅の領域は、西北では大同江を限りとし、東北では咸鏡南道の南部、安邊元山附近を界としたとされるのです。この兩界以南の半島を九州に分ち、うち五州には小京を置き、州の下に郡、郡の下に縣を屬せしめて、中央集權の郡縣政治を行ひました。今左に九州の名と所屬の郡縣數とを擧げて置きませう。

| (九州) | | (五京) | (郡縣) | (縣) |
|---|---|---|---|---|
| 一 | 尙州 | 金海京 | 一〇 | 三〇 |
| 二 | 良州 | | 一二 | 三八 |
| 三 | 康州 | | 一一 | 三〇 |
| 四 | 漢州 | 中原京 | 二八 | 四九 |
| 五 | 朝州 | 北原京 | 一二 | 二六 |
| 六 | 熊州 | 西原京 | 一三 | 二九 |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 七 | 溟州 | | 九 | 二五 |
| 八 | 全州 | 南原京 | 一〇 | 三一 |
| 九 | 武州 | | 一五 | 四三 |

今日慶州の野に殘された當時の遺物や遺蹟は、唐の文化の影響感化が如何に深く及んでゐたかを物語つて遺憾ありませんが、同樣の事情は、形をとつて迹を留めぬ精神的方面についても容易に類推出來ることです。但しそれらの物質上精神上の文化の進歩は、王侯貴族の社會についてのみいひ得ること、で、一般庶民は多くそれにあづかり得なかつたでありませう。それだけにまた文化進歩の弊害も先づ第一に貴族が被らねばなりませんでした。

文化の極盛期は直ちに爛熟頽廢期に連續するのが常です。唐の制度を模倣する中央職官の整備郡縣政治の確立は、王都王廷を飾り、貴族の富を大きくしたでありませうが、その外面的裝飾と富裕は、貴族を腐敗せしめ、權力の爭奪を起さしめました。この種の弊害が著しく社會の表面にあらはれたのが、一

朝鮮史のしるべ

統以後約百年を經た惠恭王の世です。王は遂に内亂兵のために害され、武烈王の系統はここに一旦絶えました。卽ち新羅の中代(八王百二十五年)を惠恭王で限るのは、がうした王系の變轉にもとづくのであります。

## 一一　下代の新羅

惠恭王に代り立つた宣德王は、王室の出ではありますが、直接武烈王の系統を引くものではありません。これより最後の敬順王までは、年數にすれば百五十餘年で中代と大差ないにもかかはらず、王代は二十を數へ、中代の八王代に比して三倍に近い多數です。それはとりもなほさず一王代の年數の短かつたこと、卽ち王位の安定しなかつたことを雄辯に示してゐます。實際の歷史についてみますと、その王位の不安定は、下代大部分の王が非命にたほれたことに基因して居り、血族間に於ける嗣位の爭奪は、實に醜と慘とを極めま

舊國布德鐘の天女

した。さうしてそれは直ちに地方にも影響せずには濟みません。中央に王位の爭ひがくりかへされて居る間に、地方の政治はゆるみ、亂離の狀態があらはれます。そのうち中央と直接關係する最初の事件は、憲德王の十四年(西暦八二二)金憲昌が熊州(今の公州)に叛して、國號を長安國と云ひ、建元して慶雲元年とし、一時全羅慶尙の一帶を領屬したことです。それから三年の後には憲昌の子の梵文が、また楊州(今の京城)に都を立てようとして、失敗したことがあります。憲昌の父は王位の爭ひに敗れたものでありました。

地方の政治の亂れたに乘じて、半島西南海邊の民は、或は商人として、或は海賊として東支那海一帶に活躍橫行しました。山東半島の一角を根據地として、唐・日本・新羅三國の間に往來貿易した張寶高(弓福)は、新羅僖康王代(西暦八三五年頃)の人であります。彼は歸國して清海鎭(今の全羅南道莞島)に大使として任命せられ、新羅人が唐に奴隸として買はれ行くのを取りしまつたので有名であります。

さきに申しました通り、惠恭王代を以て我が國への正式の使者の派遣が絶えますと、其後には新羅商船の私に貿易のために來るもの多く、この貿易船はやがて海賊船と化して九州の沿岸を騷がしそれについては、漂流にことよせて歸化を望むものがしきりにあらはれました。ここにも新羅の末世の狀態がまざまざと反映してゐる氣がします。

亂世の下代とは申せ、唐に對しては、各王卽位とともに使者を遣し、唐の冊封を受けました。順當な王位の繼承が行はれなかつただけ、却つて唐の冊封は必要とされたのでせう。かかる使者の派遣に際しては、學問僧學生の隨ひ行つたことも前代と變りなく、或はむしろその員數は增加してゐたやうであります。新羅の末期から高麗の初期にかけて名ある文人高僧は、殆んど皆な唐に留學した經驗を持つて居ます。就中最も有名な文士は崔致遠です。

致遠、字は孤雲、景文王代西曆八六八年頃に年十二を以て唐に入り、二十歲のとき科擧の試驗に及第し、江南道宣州溧水縣尉を授けられ、後ちに淮南節度使



の從事官として文筆を揮りました。宣州はかの詩人杜牧が嘗て任に在つたところ、文學に因緣の淺からぬ地です。彼は唐に在ること前後十八年にして歸國しました。歸國後、從事官時代に作つた公私の文を撰して二十卷となし、唐廷に進めました。今ある桂苑筆耕がそれです。彼の著作には其外二三部の名が知られ、歸國後の作は、多く碑銘として殘つてゐますが、當時の新羅は彼を容るるには、餘りに亂れて居りました。故に彼の最後は、家を携へて伽耶山海印寺に隱れて老を終つたと云ふのみで、明らかでありません。

崔致遠が唐から歸つて間もなく、新羅は愈〻群盜蜂起、最後の大動亂の世となります。中でも北原原州に起つた梁吉、その部下の弓裔、武珍州(光州)に自立した甄萱が最も有力なものです。甄萱は孝恭王の四年(西曆九〇〇)完山州を都とし、後百濟王を自稱し、翌年弓裔また王を稱し、國號を摩震と云ひ、鐵圓(鐵原)に都を定めて北方の經略に從ひました。弓裔の强味は、部下に松岳郡(開城)出身の王建を得たことで、王建は陸の將としてのみならず、海軍を率ゐて南方は

朝鮮史のしるべ

羅州の海口を占領し、後百濟が南支那の吳越と通好するのを阻止して功があ
りました。摩震國は七年にして秦封國と改められ、秦封國は八年にして弓裔
の暴虐のために自滅し、王建が同僚に推戴されて高麗國を建てることとなり
ます。餘命いくばくもない新羅と、西南の後百濟と、西北の摩震秦封高麗とが
併立の形をとつた時代を後の三國時代とか、新三國時代とか申します。

新羅の都城に先づ兵を入れたのは甄萱で、景哀王の四年(西暦九二七)俄かに
王都を侵し、たまたま鮑石亭に出遊の王をして自盡せしめ、王弟宰相以下を虜
とし、珍寶子女を劫掠して歸りました。かくて王族金溥は迎へられて王となり、敬順王と呼ばれ、
それが成就する理なく、在位九年にして群臣と議し、出でて高麗の京に入り臣
禮をとりました。高麗王は厚くこれを待遇し、新羅の舊領をその食邑とし、長
女を以て之に妻しました。

偖世九百九十二年を誇る新羅はかくして終り、後百濟また内訌のために勢



ふるはず、新羅出降の翌年を以て高麗に服し、ここに半島は再び高麗の一に歸
しました。

## 一二　高麗の國基

新羅の末期に、地方の豪族が各地に分立割據を始めてから、高麗太祖の統一
の成る日までには約半世紀の歲月を要して居り、特に後百濟の甄萱は、新羅の
都に兵を入れて劫奪をほしいままにしたことなどもあつて、内外の荒廢は實
に想像に餘りあることですが、その最後に敬順王が國を高麗太祖に讓る際は、
一兵に血ぬらず平和の間に事が運ばれました。このことは高麗にとつて幸
なことでありました。高麗はかくして新羅の舊を繼承し、それが高麗文化の
骨子となつたのは云ふまでもありませんが、高麗をして高麗たらしめるもの
は、その骨子に更に加へられた新らしいいくつかの要素があります。

先づ、新羅の都は半島の東南部に偏してゐたに對して高麗のそれは恰も半島の中央部、しかも海路の便の多い西海岸は禮成江の江口近くに置かれたのです。このことは從來比較的力を注がれなかつた半島北部の開拓について、一新氣運を助長します。今の平壤附近以北はこれまで新羅の邊境であり、野人の遊獵に委ねられてゐましたが、太祖は卽位早々弓裔の遺志をついで、この方面に意を注ぎ、平壤を西京として國都開京に次ぐ要地とし、ここに都を遷さんとする意向さへ示して居ります。この西京を策源地とする北方開拓のことは、今後代代の王によつてうけ繼がれ、高麗朝全體を通じての問題となります。ただこの一般的傾向を阻害するものがやがてあらはれ、その背景はまた高麗の時代色の一つをなします。それはいふまでもなく滿洲の勢力です。

卽ち、先づ渤海を滅ぼした契丹遼、それについでは女眞(金)、金については蒙古(元)と、相つぐ三大國の勢力が活潑にしかも根强く半島に加へられます。それは滿蒙方面に不足な物資を高麗に求めんとするものであつたでせうが、それと



ともに、それら三大國が共通して持つた南下の政策、卽ち支那本部併呑の志向に直接關係することで、南下の前提工作として東方高麗を服して置く必要あつたことは明かでせう。のみならず、或る時は高麗を經由して、海路南支那の攻征が企てられます。然らば高麗は事實さういふ點で顧られる程、南支那と關係を持つてゐたでせうか。

太祖王建の出身地が開城地方であるといふことが既に暗示して居るのみでなく、その祖先發祥の傳說にも、唐との通商のことが重要部分を占めて居ります。また太祖が弓裔の部長として活躍した時代の、最も大きな事蹟としては、海軍を率ゐて後百濟の光州羅州方面を占領し、附近の海島をもとつて、百船將軍となり、南海の海上權を把握したことが注意されます。それとともに新羅末に南支那方面に使を出した新羅人の有力者に王氏なる名のるものが著名であることを併せ考へると、王建は當時東支那海に活躍した幾多の海商の一人ではなかつたかと思はれるのです。後百濟も弓裔の奉封もともに南支那

と關係を持ちましたが、特に王建は高麗王の位に卽いてから、頻りに後唐に使を出し、やがて高麗王に封ぜられ、その年號を奉じました。後唐については後晉後漢後周と、所謂五代諸國の冊封を受け、四代光宗の十四年西曆九六三、後周を代つて國を建てた宋の冊封使を迎へ、これより以後、宋との通交は次第に發展します。滿洲勢力の下に服從せねばならなくなつてからも、この宋との關係を持續するために、多大の努力を拂ひそのことはまた滿洲勢力の壓迫を激發する結果となります。

高麗文化は、新羅のそれを承けついで、皆らしくは五代及び宋の文化の要素を加へて成り立つたものといへます。從つて滿洲關係の起らないうち、五代、宋と自由な通交の出來た間は、自から一期をなし、高麗國基の定まるのはこの時代にあります。それは六代成宗の末年頃まで、國初から約六十年の間です。

太祖卽位のはじめは、萬事新羅の舊によつて、人民の安堵を第一に考へたやうで、官制の如きも、弓裔によつて一度改められたのを再び復舊し、民の習知に

便ならしめて居り、王廷の文柄を執るものの多くが、新羅の舊臣であつたらうことも、たやすく想像されます。それと同時に、太祖朝に來り仕へた吳越國文士、雙彦規や朴巖、光宗朝の後周人、雙翼などは、新しい人物として大いに高麗のために劃策したことでせう。雙翼は後周の冊封使に從つて來り、病のために留まつた人ですが、遂に擢用されて翰林學士となり、その獻議にもとづき、始めて高麗の科擧文官試驗の制が設けられ、文風これより興るといはれる人です。

成宗朝に高麗の國基定まるといはれるのは、この朝に、內外の官職制度が一新され、充實されたことにあり、そしてそれは、大體に於いて唐の制度に則るものでありました。卽ち內に省部臺院寺司館局あり、外に牧府州縣あり、官に常守あり、位に定員あつて、內史門下省は百揆の庶務を掌り、御事都省は百官を總領し、三司は錢穀出納會計を掌り、中樞院は出納宿衛軍機の政をとりました。また地方の制度を革め、はじめ十二牧を置き、後ち改めて十道十二州節度使となしました。內外の制度は、高麗一代には幾度か變革あつたとはいへ、成宗の

朝鮮史のしるべ

制度改革は特に大規模な基本的なものです。

| | (十道) | (十二州節度使) |
|---|---|---|
| 一 | 關内道 | 楊州左神策軍節度使　廣州奉國軍節度使 |
| | | 海州右神策軍節度使　黄州天德軍節度使 |
| 二 | 忠原道 | 忠州昌化軍節度使　清州全節軍節度使 |
| 三 | 河南道 | 公州安節軍節度使 |
| 四 | 江南道 | 全州順義軍節度使 |
| 五 | 嶺南道 | 尚州歸德軍節度使 |
| 六 | 山南道 | 晉州定海軍節度使 |
| 七 | 海陽道 | 羅州鎮海軍節度使 |
| 八 | 嶺東道 | (慶州金州) |
| 九 | 朔方道 | (春州和州溟州) |
| 十 | 浪西道 | (西京) |



右の如き十道十二州節度使の制は、其後更に一二の變遷を經て五道兩界の制となります。

| | | (京) | (牧) | (府) | (郡) | (縣) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 楊廣道 | | 一 | 三 | 二七 | 七八 |
| 二 | 慶尚道 | | | 二 | 三〇 | 九二 |
| 三 | 全羅道 | | | 二 | 一八 | 八二 |
| 四 | 交州道 | | | | 八 | 二〇 |
| 五 | 西海道 | | 一 | | 六 | 一六 |
| 六 | 東界 | | | 一 | 九 | 二五 |
| 七 | 北界 | 一 | | 一 | 二五 | 一〇 |
| | | | | (大都護府) | | |

さて成宗はかかる官制の整備に一期を劃したのみでなく、社會の風教百般にも意を留め、その即位のはじめに當つて重臣に封事を上つらしめ、時政の得失を聞きました。その時上つた推承老の二十八條に及ぶ狀は特に有名で

一二　高麗の國基



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

す。

承老は慶州の出、年十二を以て高麗太祖に仕へて以來文筆を委ねられた人、その二十八條のはじめに西北卽ち平安道方面の防戍のことを述べてゐるのは意味極めて深いことで、今後高麗の大問題はこの方面に頻發するのであります。

## 一三　外難と李崔二氏の專權

崔承老がその封事のはじめに西北防戍のことを說いたのは滿洲勢力の恐るべきを指したものに外なりません。新羅一流時代には滿洲ではフルカ河畔に都する渤海國がありました。その南境は今の咸鏡南道の南端元山附近に及び、平安道方面では鴨綠江の航行は、大體渤海の自由にしたところですが、それ以南大同江流域に至る一帶は渤海新羅兩國何れの力も及ばない謂はば



無所屬の荒地帶となつてゐました。その上兩國ともその國勢はいはば求心的でしたので、その間に特別な交涉事件などはなくてすみました。

然し高麗太祖卽位後數年にして渤海は契丹のために滅ぼされ、その民の高麗に投歸するものも少くありませんでした。契丹はシラムレン河のほとり、今の滿洲國興安西省の地方に興つて、內外蒙古を併せ、更に南方支那本部を目がけて進みました。宋が國を建てた頃、高麗光宗朝の頃には契丹の勢力は今の河北山西二省の北部に達して居り、この勢さかんな契丹と高麗との間には、上に申した荒地帶があつて、そこには女眞族が蟠居してゐたのです。早くからはじめられてゐた高麗の北方開拓は、結局この女眞族の撫馴にあつたわけですが、契丹もまたこの女眞の服屬に著手し、遼東を定めて鴨綠江岸に達した頃には、高麗の拓地も既に江岸に及んでゐり、ここに兩國の勢力は相觸るるに至り、やかましい問題が起ります。

高麗と契丹との接觸、交涉には凡そ二つの意味が認められます。一ッは右

に申じた女眞族を爭ふこと、二ツには契丹と宋との攻防の關係に對して、高麗はその側面に在りますから、宋に對しても契丹に對しても、共に牽制力を持つてゐるわけです。この側面の力を利用せんとして、先づ高麗に著手したのは南方の宋であり、次に契丹です。

高麗がはじめて契丹の正朔を奉じ屬國の立場に立つたのは、成宗十三年(西曆九九四)のことですが、其後穆宗を經て顯宗朝には、その來征を被ること數次兵は王都開京に及び、王は難を避けて南行したこともあります。

顯宗の次に立つた德宗は、契丹の內亂に乘じて北境に長城を築かしめ前後十二年餘を費して成りました。西は鴨綠江畔に起り、脊梁山脈を越えて東海岸は咸鏡南道定平に及ぶ大工事で、今尙ほその遺址をとどめてゐます。

顯宗朝は、高麗國難の第一期ともいひ得るでありませうが、その國難に際して特筆すべき事業が遂行されました。それは右の長城の工役にも比すべきもので、所謂高麗大藏經の初回の彫造です。この事業は傳へられる如く、佛力



によつて契丹の災を攘ふために行はれたと解するには異論ありませうが、外難調伏と全然無關係に行はれたとすることもまた當を得ないでせう。とにかく顯宗朝から文宗朝まで六十餘年にわたつて繼續された大事業です。さうしてこれを更に大成せしめたのは、文宗の第四子祐世僧統大覺國師義天が、畢生の事業として遂行した續大藏經の蒐集と開板とです。義天の蒐集したところは、新編諸宗敎藏總錄三卷によつて、その內容がうかがはれ、合計一千十部四千七百四十卷の大量に上つてます。義天は文宗九年に生れ、肅宗六年(西曆一一〇一)四十七歲を以て沒しました。時あたかも高麗國難の第二期、卽ち女眞の難の起らんとする頃であります。

さきに德宗朝に著手されて、靖宗朝に成つた長城は、契丹を防ぐと同時に、半島內に居住する女眞族をも防ぐ二重の目的を持つものでした。當時女眞の中心は、今の咸鏡道と、滿洲の黑龍江附近と、二つに分れてゐましたが、肅宗朝の頃にその北部のもの、完顏部が漸く優勢となり、南部をも次第に併せ、高麗、東北



アジア歷史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

面の一大恐怖となりました。ここにその討伐は肅宗末年から睿宗初年にかけて實行され尹瓘九城の役として有名です。瓘は十數萬の兵を以て之に當り、定平の長城外咸興平野を占領し、九城を築いて還りました。然し女眞の報復の勢ものすごく、九城の地域はわづか數年にして返還されるに至りました。この後間もなく完顏部の耶律阿保機は諸部統一の業を成して、國を建てて金といひ、南に下つて契丹を討たんとし、それにつけては、高麗との和親にことさら意を用ひました。

契丹を敵とする點に共通目的を見出した金と宋とは、やがて連合して兵を出し、遂に契丹は高麗仁宗の三年西暦一一二五を以て滅ぼされました。然しそれと同時に金は宋を新しき目標として兵を進めることとなり、高麗はまたも宋金兩國から助勢を要求されます。契丹によつて苦い經驗を嘗めさせられた高麗は、金の兵を招く愚を再びすることなく、宋金に兩屬の形をとつて二重外交の巧みさを發揮しました。ところがこの頃に至つて高麗王室にとつ



て、契丹女眞の外難と相對する內部の危期が漸く現實しようとして來ました。それは外戚李氏の專權と文臣に對する武臣の擡頭とであります。

さきの靖宗から仁宗に至る七代約百年は高麗の中期、全盛期といはれ、文學、美術、工藝、佛教とあらゆる方面に於いて圓熟した一期ですが、その中に立つた高麗王室は、甚だ危い位地に置かれました。その第一の因は、文宗以來外戚となつた慶源今の仁川出身の李子淵が頓みに勢をほしいままにしたことにあります。卽ち文宗の后妃三人は李子淵の女であり、特にその一人の生むところが順宗宣宗肅宗と三代相ついで王位につき、子淵の孫、資謙の女は二人までもその甥に當る仁宗に配せられてゐます。仁宗は十四歲を以て資謙に擁立され、文武の權はふたつながら資謙の手に納められ、李氏一門の榮華は我が藤原氏のそれにも似たものがありました。ここに王及び內臣等は武臣と謀つて資謙を仆さんとする計を立てるに至り、資謙は宮闕を燒き、反對黨の多くを殺して自からを全うすることが出來ましたが、この兇闕のことによつて彼は

朝鮮史のしるべ

流罪となり、李氏の榮華は一朝にして破られました。

右の事件についでは西京平壤遷都運動に端を發した僧妙清等の反亂あり、これより、從來王廷に勢を認められなかつた武臣の擡頭專横をもたらし、仁宗の次ぎに毅宗が立つと、大將軍鄭仲夫の亂となり、仲夫は文冠を戴くものは大小となく皆なこれを殺し、果ては毅宗を廢して明宗を立てるに至りました。

この朝にまた鄭仲夫等を討つて前王を復せんと企てるものあり、それは不成功に終りましたが、文臣またこの舉にあづかつて殺されたもの多く、世は愈〻武臣のものとなりました。

其後武臣の權力を收めたのは、同じく將軍出の崔忠獻で、彼は明宗を廢してその弟神宗を立て、更にこれを廢して康宗、次ぎに高宗を立て、牛耳崔氏四世專權の基を開きました。かくて高麗王廷の異變相つぎ、國權の所在、漸く他に移らんとする時、三たび國難は外部から來り、王位はために却つて存續するを得ました。



## 一四　江華遷都

さきの慶源李氏一門の榮華を我が藤原氏のそれに比し得るとすれば、牛耳崔氏の執權は、我が平氏のそれにたとへることが許されるでせう。崔忠獻の家系としては、父なる上將軍崔元浩以前は知られて居ないのをみても、決して古い家柄でないことが分ります。崔門の勢力は殆んど忠獻の一代七十年の間に築かれたものです。彼によつて擁立された王は四人、彼の爲めに廢せられた王が二人、これをみても彼の專權振りは想像に餘りあることです。

明宗を廢して神宗を擁立してから、忠獻は不測の變を恐れて、大小文武官を弘邸に招致し、此れを六番に分ち順番交代して宿直せしめ、號して都房と言ひ、又その出入の折は六番のもの總べてをして衛り從はしめました。總て其の外戚盧瑄と共に私第に於いて文武官を注擬し、爵を授ぎ、爲めに吏部兵部の長

官は唯だ官衙に坐して檢閲する空位の官となりました。斯くなるに及んでは、高麗の政治は都房政治ともいふべきです。都房は、忠獻以前、かの鄭仲夫を誅した將軍慶大升に始まるやうですが然し大升の時までは、未だそこで注擬が行はれるやうなことはありませんでした。都房政治は一面我が幕府政治にも似たものです。

さて忠獻は、彼が最後に擁立した高宗の六年(西暦一二一九九月にその私第に卒し、その子崔瑀改名怡が代りました。時に高麗にとつては由由しい外交問題が、新たに發生して居りました。それは蒙古との問題です。

高麗が蒙古を知るに至つたのは、高宗四年の頃で、それは蒙古の太祖鐵木眞が今の滿洲國興安北省外オノン河畔に即位の式を擧げて成吉思汗の號を稱してから、十二三年を經た頃です。ことここに至るにつけては、蒙古を半島に導く二つの事件があつた事をいはねばなりません。成吉思汗が南下して北支那に金の本據をつかんとする時、遼東方面にはさきの契丹の遺民が金に叛



して獨立せんとするものあり、又金の叛將蒲鮮萬奴なる者が、豆滿江流域に據つて國を立て、東眞國と稱しました。契丹の遺民は、金及び蒙古に破られた果ては鴨綠江を渡つて一擧南侵高麗の忠州原州の附近に達し、此處で大敗して から江原道を經て一旦咸鏡道の女眞の地に入りましたが、再び南下して京畿、黄海、兩道方面に出で、高麗の將軍趙沖に追はれて平安南道の江東城に包圍されました。これは高宗五年のことです。高麗は翌年蒙古及び東眞國の援助を得て漸くこれを討つことが出來ましたが、其の代償として兩國に對して兄弟の約を結び、年年貢賦せねばならなくなりました。

江東城攻戰の後ち數年にして蒙古では成吉思汗は歿じ、太宗が立ちました。太宗は南方、金の討滅に力を注ぐと共に東方高麗に威壓を加へ、兵を入れて開京を圍みました。高宗は已むなく降服を誓ひ、高麗の王都以下府州縣には蒙古の達魯花赤(知事)といふ役人が置かれて行政の監督に當る事になります。

蒙古太宗の軍が引き揚げて直後高麗政府にとつて重大事が決行されます。

それは王都を開京東南の海島なる江華島に遷したことです。十九年壬辰西暦一二三二七月王は島に渡り、ここに江都時代は開始されます。この舉は表面はどこまでも蒙古の難を逃れ、王室の安全を期する目的を以て決行されたことです。そして結果よりみれば一應その目的に對して甚だ有効な措置であつたかの如くみえます。けれども當時の王室が如何なる位地に在つたか、政治の實權が何處にあつたかを顧みれば、この計畫者の中心がかの崔怡その人であつたらうことは推測に難くなく、遷都はむしろ崔氏都房の所在の移動とも解し得るでせう。蒙古はこの入島を以て叛意の表徴となし、しきりに兵を出して半島の各地を攻略し、民のその災害を受けたことは莫大なものがあります。江都時代はかかる民の犠牲によつて繼續されました。

世界征服の蒙古が、高麗をして短期間に還つて陸地に就かしめ得なかつたのは、蒙古兵の弱點海に弱いといふ缺點が、江華の天險を益〻天險たらしめ、在島の王以下は、海路南鮮の税米物資を障害なく取り入れて、生活に不自由を缺



かなかつたこと等に基づくものでありませう。

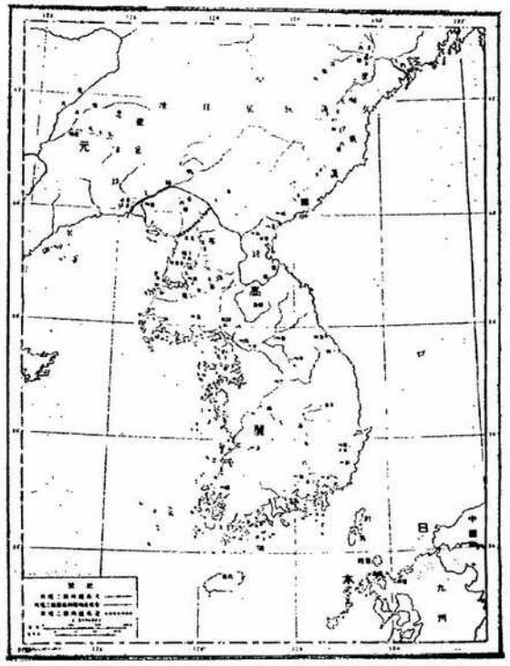
遷都の中心人物崔怡が島中に死すると、蒙古に對する態度は直ちに軟化して、蒙古永年の要求であつた出陸朝覲に一歩近づきました。卽ち江華島對岸の陸地に新しく宮闕を創めました。然し怡の後を承けた崔沆はこの時江華に中城を築いて防備を更に嚴にし、なほ在島を强調しましたので、蒙古は兵を增して來り臨み、その災害は前後未曾有といはれるに至りました。そのうち、崔沆も病死し、その子崔竩また殺されて、四代六十年に餘る崔氏の權力はここに覆され、蒙古に對する方針も、稍〻改められて、遂に王は舊都に還ること、太子を遣し朝見せしめること等を約し、先づ太子は蒙古に向けて出發しました。高宗四十六年四月のことで、入島以來二十八年です。しかも是歳蒙古使の監視のうちに、江華の内城外城が破壞し始められた時、高宗は島に薨じました。

高宗島中の生活は、崔氏の專横と連年の蒙兵の侵害との間に營まれたのであり、その最後の如きは、まことに劇的な場面ですが、ここに特筆すべきは、この

内外多難の際に高麗の一大文化的遺物は成就したのでした。さきに顯宗文宗の間に大藏經がはじめて半島に彫造されたことを申しましたが、その板木は高宗十九年、卽ち入島の歳に、今の大邱郊外にあつた符仁寺で蒙古兵のために烏有に歸しましたので、數年を閲でず、君臣は佛力によつて現下の蒙兵の難をはらはんものと、島中に新願を立て、改めて第二回の彫造を開始し、主として全羅道方面板材の豐かな地方に命じて事に當らせ、前後十六年にしてその工を終へて居ります。この板木は今慶尙南道伽倻山海印寺に寶藏され、佛敎文獻史上、極めて高く評價されてゐるものです。

さて、約に從つて太子は蒙古に入朝し、崔氏の中心はたふれ、江都は破壞され、舊京には復興の業が創められても、まだ本當の還都は實現されません。三十年に近い江都の生活は、案外の根をそこに張つてゐたのです。太子は蒙古から歸り來つて王位（元宗）につきましたが、以後十年、江都時代はなほ續けられます。その間國政をほしいままにしたのは金俊、それについては林衍で、林衍は






南洋諸史地圖に學ぶ

高麗時代形勢圖（西曆一二九〇）

遂に元宗を廢して、一時王弟を位につけましたが蒙古の世祖忽必烈の嚴責によつて、元宗を復位せしめ、間もなく悶死し、その子の林惟茂も斬られました。かくて元宗は漸く舊都に還るを得て、前後三十九年の江都時代は終局したのです。西暦一二七二。

元宗はかくして内廷の權臣から脱れることが出來ましたが、その時はまた蒙古のとりことなつてしまつた時であり、これより蒙古服屬の時代に入ります。さうして先づ負はされたものは蒙古が我が國に修好を求めんとするにつけての東道といふ大役でありました。

## 一五　元寇と高麗

高宗が島を出でんとして島に殁した頃、蒙古では世祖忽必烈が位に即き、間もなく國號を元と稱し、その國勢は一展せんとしました。太祖成吉思汗以來、

蒙古の目ざすところは、もとより南支那は宋の討滅に在り、區區たる高麗にあつたのではありません。然し高麗の去就は蒙古の南征にとつて、さのみ輕輕視すること出來ないことも、宋と高麗との關係を考慮すればたやすく肯かれるところです。しかも南征の業は、太祖以來早くも二十餘年を過ぎてゐます。新しき英主忽必烈は、南に向ふに當り、先づ兵を二分また三分する不利を覺りました。これまでしきりに武力を以て臨んだ對高麗策はために緩和されました。高宗の訃報が蒙古に至つた時、折柄入朝の高麗太子を還し王位(元宗)に卽かしめた次第には、世祖の懷柔策がよく認められます。

かかる方針に出た世祖が、次段に敎へられ考へついたことは、高麗を經由して、海路南宋を討つことの便益でありました。元にとつての高麗の位置は、とみに一變したといへませう。つづいて高麗人趙彝によつて我が國の事情が告げられ、日本と南宋との關係は、また新しく世祖の顧慮を要する問題となりました。元の日本通好の企ではかくして起つたのです。最初の使者梨的と



殷弘とが命を奉じて高麗に來たのは、元宗の七年十一月で、これより事は始まります(西暦一二六六)。

世祖の日本顧慮に、どれほどの妥當性があつたかは別問題として、こゝにその前後の頃の日宋、日麗關係を考へますに、古く高麗太祖には日本通交の意志あり、半島統一の直後、再度使を遣はして通交を求めましたが、その儀禮態度に於いて、古來我が國が半島諸國に臨んだ傳統的感情と相容れぬものあり、また我が對外方針が退嬰的傾向に固定しつゝあつた等の事情によつて、公の通交關係は成立せず、そのまゝこの當時に及んでゐました。然しその間漂流人の送還などによる彼我使者の往來は屢〻行はれ、他面私的關係に於いては前代新羅末にその萌しを示した商人の來航貿易するもの次第に活潑となり、我が太宰府の門戸博多津また薩摩の坊津などは、高麗宋の商人に賑はひ、これに對して我が商人の彼に渡つて貿易を營むものもすくなからず、三國の私的通商關係は意想外にも複雜でありました。かかることは平安時代から、平氏の時

朝鮮史のしるべ

代を經て鎌倉幕府成立に及んで愈〻盛んとなり、特に幕府は關東に在つて、西國の統制は自から弛み彼方の宋は北敵の侵略に苦しみつつ、常に我が通商を歓迎したので商船の往來は頻りに行はれ彼我僧侶の渡海も繁く、南宋文化の輸入とその影響は顯著なものがありました。また我が商人には高麗との間に特に定約して毎年所謂進奉船を出して金州(金海)に至るものもあり、高麗はこの地に客館を設けて彼等を接待しました。これらのことをかへりみれば、元が高麗を服して宋に臨むに當つて、我が國を顧慮したことは當然と考へられます。

さて元は我が國に通好を求める使者を出し、高麗をしてその嚮導に當らしめんとしたに對し、高麗は言を左右に托してこれを避け、事件の發展を畏れたのですが、漸く使者は我が國に來ても、その使命は遂に我が國に拒絶せられ、の文永十一年(元宗十五年)弘安四年(忠烈王七年)兩次の所謂元寇となつたのです。元寇の顛末は周知のことで、今更に述べる要もありませんから、ここでは



主として元宗七年から前後殆んど二十年近い長期にわたつて行はれたこの交渉事變のために、高麗は如何なる負擔に甘んじなければならなかつたかをみることとします。

元が日本通好に著手した後も五年、半島慈悲嶺以北は元の領域に編入され、西京(平壤)に東寧府が置かれました。これは直接には、高麗の反臣崔坦が西京以下六十城を以て元に投降したからですが、一面、南宋經略ならびにそれにともなふ日本招諭の用意でもあつたことと推測されます。東寧府は文永役の當年、廢して東寧路總管府とされ、弘安役の後も九年にして廢せられ、慈悲嶺以北は再び高麗の有に還ります。

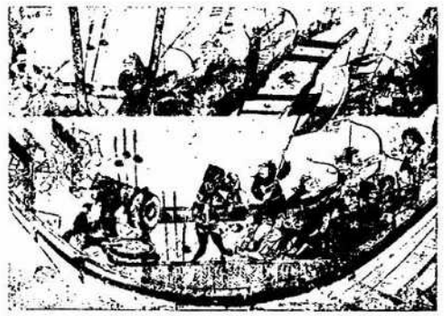
元は東寧府創置の年、また五千の兵を遣はして開京西京金州(金海)以下すべて十一箇所の要地に屯田を置きました。これも我が國に對する用意たることは明かです。

さて我が國との交渉成らず、遂に兵を用ふることになつては、高麗の負擔が

愈〻大きくなつたのはいふまでもありません。第一回の渡海文永役に用ひられた軍船は、大小幷せて九百艘、それは全羅道の遠山及び天冠山に於て、工人三萬五千餘を使役して造られた高麗船でありました。また同年渡海の軍は、所都洪茶丘等に率ゐられ總勢二萬六千、そのうち高麗軍は六千に過きませんが、殘り二萬のうち、五千はさきの屯田軍、一萬五千は新たに派遣された蒙古軍及び宋人から成る水軍で、それらは皆な高麗を經由して合浦馬山から船を出したのです。

四萬の大軍は、先づ對馬壹岐を襲ひ、進んで筑前に迫り、我が小貳菊地大友の諸軍と博多灣頭に戰ひました。我が軍苦戰奮鬪して漸くこれを退けた折柄、忽ちの暴風に遭ひ、元軍は辛うじて逃れ去つたのです。

この失敗にも懲りず元はまた使者を送り、國書をもたらして前意をかさねましたが、我が鎌倉幕府では北條時宗の態度愈〻硬く、西陲の防備は著著として進められてゐました。かかる間に元は永年の宿題であつた南宋を漸くに



蒙古襲來繪詞の一部（上文永役ノ役　下弘安役ノ役）

して滅ぼし、その翌年を以て第二回の出兵を我が國に對して決行します。

今回卽ち弘安役には、新しく元の領土となつたばかりの南支那からと高麗からと二方から兵は發せられました。前者「江南軍」は范文虎に率ゐられる三千五百艘の戰艦と十萬の南宋人から成り、後者「東路軍」は前回と同じく所都洪茶丘に統率される九百艘の船と四萬の軍から成つてゐます。四萬のうち、高麗兵は一萬で、船は勿論高麗で造られたのです。東路軍先づ至り、博多に迫りましたが、我が防戰奇襲になやまされて上陸し得ず、江南軍は期に後れて七月漸く來著し、まさに兩軍合して軍を整へんとする時、七月晦日夜半の神風によつて覆沒、僅かに殘る敗兵も、我が軍の捕獲するところとなりました。

かくて元の世祖忽必烈の前後十六年にわたる企圖は全く水泡に歸し、これがために高麗の餘儀なくせしめられたところは、右の如き多數の戰艦の建造、軍兵の提供のほか、水手等雜役の供給、通過の元軍の食糧などの大半は高麗の受持つたところでありまつて、前後その負擔の額は有形無形著しいものであつ

たとせねばなりません。

さて元宗は初回の軍の出發三箇月前に薨じ、時に世子諶は元の都(今の北京)に在つて元の世祖の女齊國大長公主を妃に迎へた直後のことで、世祖は直ちに諶を高麗國王に冊封して國に還らしめました忠烈王。元宗即位の頃から既に高麗は元の藩屬國となつてゐましたが、ここに至つては關係は愈〻密接となり、次に立つ忠宣王はその齊國大長公主の所生です。これより後ち忠宣、忠肅、忠惠、恭愍の諸王はすべて元室出の公主を妃とし、即ち駙馬王であり、元室と高麗王室とは別甥の間柄となりました。このことは單に王室の蒙古化を招いたにとどまらず、社會一般にも多方面の影響を投じたと思はれます。蒙古的風俗の流行は最もあらはなことであり、そのほか言語なども蒙古語が入つて常用語となつたものが、幾多ありはせぬかと考へられます。何故ならば、元の支配は專ら元自體の利益のためのものではありましたが、前後殆んど百年の間、半島に及ぶからです。



## 一六　高麗より李朝へ

元寇の大難を經て、元と高麗との關係が上に述べたやうに一段落してから高麗王は江都時代とはまた異なる意味に於て實際の政治から離れてしまひました。世子はもとより、王自身が元の大都に在つて、開京に空位となり、宰臣は大都よりの號令によつて留守をあづかるといふことはしばしばであつたのです。

かかる不自然な情態のもとに於いて、一般人民の生活が幸福であり得やう筈は決してありません。それを更に新たにしたのは海寇です。

元寇の後ちをうけて、我が國民の海外に渡航して貿易を營むものは愈〻その數を增し、時にその貿易が意のままに行はれぬ時は、非常手段に訴へることなどもありました。(さきに申した金州の客館——接待所——は元寇以後廢止さ

れてゐました。かやうな事態は當時我が國に於ては西邊の統制驍緩し、それに加へて半島から大陸沿岸一帶では防備甚だ手薄であつたことなどがその勢を助長して、遂には常に亂暴を事とする徒輩を出ださしめたことと思はれます。かれらの行動に、元寇に對する敵愾心がどの程度まで働いたかは甚だ疑問で、それは彼我の社會狀態が自からに導いた現象で、かの平安朝中期の新羅の海寇と同じく、やはり時代の所產に外ならぬと解すべきであります。

海寇と名づけらるべきものの史上に見えるのは、ずつと古く江華遷都以前に始まるやうですが、高麗が痛切にその害を感ずるに至つたのは、元寇の後ち約五十年、忠定王初年からで、京畿以南の諸道は殆ど連年その殘害を蒙り、やがて高麗の流民がその誘導に當つて、被害は沿海地方から內地に及び、單に所在の米倉等が荒らされるのみでなく、稅米運送の船舶などは、海上に於いて拿捕されその勢は年ごとに愈〻猖獗を極めるに至りましたから、その害は上にも下にも、海にも山にもみられたのです。高麗人の內應し、また海寇にまれた行



動をとるものをも生じ、かくて海寇對策は、恭愍王代以後高麗末期の重大問題となります。

恭愍王が王位に卽いた頃は元の順帝の治世で、時に元室の勢威は漸く衰へ、盜賊各地に起つて、或は國號を建て尊號を自稱するものなどありましたが、就中揚子江方面に勢を養つた朱元璋なるもの最も著はれ、彼は金陵（今の南京）を根據として數年の間に支那の南半を併せ、遂に北進して元の大都（北京）を占領するに至りました。順帝以下元の君臣は北に逃れて開平（上都、今のチャハル省多倫縣の北西）に遷り、朱元璋はこの年、金陵に於いて帝位につき、國號を明と稱しました。高麗恭愍王十七年のことです（西曆一三六八）。

これより先き恭愍王は、卽位後數年を出でぬ頃、早くも元の衰勢に乘じて、東北面（咸鏡道）の從來久しく元の領域に沒してゐたところを回復し、西北では鴨綠江を渡つて北進の勢を示しました。然し間もなく明の使者は來つて高麗を招諭しましたので、高麗も之に對し一時服屬の意を表するに至りました。

さて高麗では、恭愍王の政治が、その前半に似ず後半甚だ亂れ、僧遍照俗名辛旽を寵用して朝臣の忌むところとなり、辛旽は誅せられ、王また在位二十三年にして宦者の爲めに弑せられ、王子江寧君禑は、僅か十歲にして侍中李仁任に擁立されました前廢王。

開平に遁つた元北元はなほも餘勢を張つて明に當らんとしましたから明の太祖はこれに對し先づ遼東方面の經略を開始し、北元はまたしきりに使を高麗に遣はして援軍を求めます。高麗の朝臣は親元と親明の二派に分れ、方針一定するところありませんでしたがその間遼東の混亂に乘じて自から利せんとし、親元派の中心人物であつた崔瑩は曹敏修李成桂兩將をして遼陽に明の遼東都指揮使司を攻めしめました。兩將は軍を率ゐて鴨綠江中威化島に至り、ここに軍を留め、上書して明を攻むることの不利を說きましたが、瑩の容るるところとならなかつたので遂に軍を回し、遁ぐる瑩を追ふて開京に還り、瑩を流し、王禑を廢して王子昌を立てました後廢王。



ところが間もなく前廢王禑の復位を圖る陰謀が發覺したことを機として、當時最も勢力を有した李成桂は、また王昌を廢し、定昌君瑤恭讓王を擁立しました。これより成桂の勢は益〻張り、王氏に代つて李氏開國の氣運至り、それに反對する鄭夢周圃隱及びその一派が除かれるとともに、恭讓王は位を讓り、李成桂は興黨に推されて開京の壽昌宮に卽位しました。時に成桂は歲五十八でありました(西曆一三九二)。

李成桂は、卽位の當時は國號もなほ高麗といひ、諸般の制度みな舊のままでしたが、先づ使者を遣はして明の承認を求め、許されるとともに國號改稱の命を受けて朝鮮と定められ、ついで地を相し、都を漢陽卽ち今の京城に遷し、景福宮を創め、新王朝の基地としました。明の承認を得るといふことは、とりもなほさず明の權威によつて王權の保障とするもので、それは對外的といふよりも對內的に必要な條件です。この明を宗主國と仰ぐ所謂事大政策は、太祖によつて樹立されたのですが、なほ二代定宗までは朝鮮國王の冊封を受けるこ

とは出來ず、三代太宗に至つて、はじめて國號を賜はり完全に明の屬國となりました。

## 一七　南北の二問題

李朝五百年の歴史を顧る出發點は、太祖李成桂一代の經歴を吟味することに在ります。太祖は高麗忠肅王四年乙亥(西暦一三三五)、今の咸鏡南道永興郡黒石里に李子春の第二子として生れました。その遠い祖先は、今の全羅北道全州完山の出自と傳へてゐますが、少くとも太祖祖父の頃からは、既に咸鏡道に居住してゐました。これが第一の要件。次に太祖は武功を以て高麗王廷に地位を得た所謂武人です。その武功は北方の女眞人征伐と、南方の海寇防禦とに於いて認められた。これが第二の要件。第三の要件は、かの威化島の回軍を機として、新興の明に臣事する態度を表明して、親明親元二派に分れてゐた



當時の高麗王廷に一定の方策を樹立し、その盟主となり、遂にその擁立した恭讓王の讓りを受けた形式によつて王位に卽いたことであります。

李氏の出身地が今の咸鏡南道永興であることが何故に意味深いかといへば、その地方は從來高麗の領土外に在つたからです。蓋し高麗の北方開拓がその全時代を通じての一大使命であつたことは既に言及して置いたところです。但し北方といつても西北方面平安道では、事件も多く、出入も複雜ではありますが、可なり成功して大略鴨綠江畔に達することが出來ました。それに對して東北方面咸鏡道では、或る時は鐵嶺江原道の北境、或る時はやや進んで定平郡外の長城を限りとし、以北は、遼金元の北方諸國の領土とされてゐました。睿宗王代尹瓘九城の役として名高い女眞征伐には、一時咸興平野を占領したこともありますが、それはほんの數年にしてまた女眞に還附せなければなりませんでした。

かやうにしてこの地方は、從つて北方との關係が强かつたとはいへ、その住

朝鮮史のしるべ

民たる女眞人は傳統の部族生活を繼續して別天地を營み、南北からの移流民もしばしばみられました。李氏數代は實にかかる女眞部族の境地に於いて成長したものであります。

李氏が高麗に歸順するはじめは、恭愍王が元の襄頭に乘じて東北西北相應じて兵を出し、領土擴張をはかつた時、太祖の父李子春が內應助軍したことにはじまります。子春はその功によつて兵馬の官を授けられて咸興に鎭し、太祖はまた父のあとをついで更に北方の女眞征伐に武功を立て、漸く中央に用ひられるに至りましたが、その根底背景には祖先以來撫育した女眞人の力を重く認めねばなりません。

思ふに朝鮮史に於ける李朝時代の史的使命の一つは、現今の朝鮮地方の疆域を大略劃定したこと、言ひ換へれば從來比較的所屬不確實であつた咸鏡道及び平安道奧地を半島の政治圈內のものとしたことであります。その事業に成功したのは、李氏の出身地そのものが、それを既に豫約してゐるかの如き



感がします。この北境經略の問題は、五十年近くの歲月を經て、四代世宗王代に至り、東は豆滿江以南の地を收めて六鎭鍾城會寧慶源慶興穩城富寧を設け西は鴨綠江上流地方に四郡茂昌虞芮慈城閭延を置いて一段落します。

次に海寇を討つて名を著はした太祖は卽位に至つては當然のなり、ゆきとして、その善後處置に當りました。海寇對策としては、既に半島に至つたものを討つのは消極的な手段であることいふまでもありません。その本據の地に於いて、その地の主權者によつて發航を抑壓してもらふのを最も賢明の策とします。故にこの禁制については、既に高麗時代からしばしば使が遣はされ、それに答ふる九州探題の使者も渡海したこともありましたが、太祖は卽位元年早くも使を出して室町幕府に好を地じ、禁制を請はしめ、それとともに、京畿慶尙全羅三道に防備の官を出したり、また投降の者には官職を與へてその懷柔に資するなど、各種對策の方針を示しました。二代定宗の元年、我が應永六年西暦一三九九に至り前將軍足利義滿も使を遣はして答書を送りました

のでここに室町幕府と朝鮮との修交が成立しました。其後彼我使節の往來頻りに行はれ朝鮮からは將軍足利義政の時まで數次の通信使が來り京都に至つて將軍のために慶弔修好の意を通じ幕府からもまた朝鮮國王の吉凶慶弔の使或は大藏經などを求める使者が出されます。その使者には京都五山の僧侶が充てられ一行は王都京畿に至り鄭重な接待を受けまた隨行の人人は貿易を營むことも出來ました。

公の修交がかくの如くして發展したとともに其他の私の渡航者に對しても朝鮮はつとめて優遇し且つ自由な貿易通商の便を與へましたので所謂海寇は自然平和な通交貿易者となり諸大名諸寺社商賈の使船を出すもの漸く多くやがて朝鮮ではその應接に苦しみ世宗の頃には貿易の制限に關する定例が自然に立てられ渡航の港を限つて乃而浦薺浦慶尙南道熊川富山浦釜山、鹽浦蔚山郡鹽浦の三浦とし或は毎年渡航の船數を定めたり渡航者の手續きを規定したりしました。



東萊富山浦之圖

東萊富山浦之圖（海東諸國紀）

かかる傾向は世宗二十五年癸亥我が嘉吉三年西暦一四四三對馬宗氏と朝鮮との間に結ばれた條約によつて一段落を告げます嘉吉條約癸亥約盟。これによつて宗氏は朝鮮關係のことをほとんど一手に掌握する形になりました。

この後ちのことをついでに少し附け加へて置きます、右の條約以後我が西邊の人人は、宗氏の紹介によつて渡海しましたが、六十餘年を經た中宗五年庚午、さきの三浦に居留する對馬島人が、年とともに勢を得て來た時、貿易壓迫のことから、宗氏は兵を出して薺浦に攻め入り、三浦の居留民も之に合流して騒動を起しました(三浦の亂。この事件によつて對馬と朝鮮との交りは一時絶えます、然しかくては對馬の死活にかかはる問題ですから、宗氏は室町幕府に訴へて復舊をはかり、幕府は大内氏をして交渉せしめました。交渉の結果、亂の翌翌年新たに條約、永正條約壬申約盟が出來、宗氏との貿易は制裁の意味を以つて削減され、三浦のうち釜山鹽浦の二浦は鎖されて薺浦のみが許され

ろに至りました。其後約三十年を經た中宗三十六年我が天文十年(西暦一五四一)またも薺浦で對馬人とその地の住民との喧嘩が起り、三年の後ち居留貿易の港は釜山に移されました。

以上は、太祖の遺業＝南北二つの大問題が、四代世宗の頃までに成就された次第を述べて、ついでに其後の我が國との關係の大事を一二附說したつもりです。かかる對外問題の解決に對しては、內部の整頓を著著として進み、文化の興隆も期して待つべきものがありました。

## 一八　文獻整備

世宗王代は文化の方面に於ても一期を劃する時代です。前代高麗末期以來の風潮はここに實を結びました。高麗末は政治的には混亂した時代でしたが、文化的には活潑な一面を持つてゐます。それは元に服屬以後、高麗の朝



臣の元都に往來、逗留するもの多く、そこには南宋の文人の來り住むものもすくなからず、彼我交遊の間に、南宋の思想學問の新しい刺戟を受けたこと、また元が高麗人にも科舉の試驗を受ける資格を許し、內外共通の試を行ひ、これに官職を付與したことなどが主な原因となつたと考へられます。また忠宣王が元都に萬卷堂を構へて文士周旋のところとしたことや、元の皇太后が南宋の秘閣から將來した經籍四千三百七十一冊、一萬七千卷を忠肅王に賜はつたといふことなども偉へられてゐます。

高麗末の朝臣文士は、多く李朝に移つて、その初期の文運を贊當しました。その人人による名ある述作編纂書は、國初半世紀に多數遺されてゐますが、先づ公の意味を持つ、謂はば官撰のもの二三をあげてみますと、第一は太祖以下の實錄です。實錄とは王が薨じますと、その王一代の事蹟、事實を、年月にかけて編修したもので、それは遠く支那の古例に倣ふものです。半島では既に高麗の初期から行はれて居りました。李朝になつてもその例を踏襲して、太祖



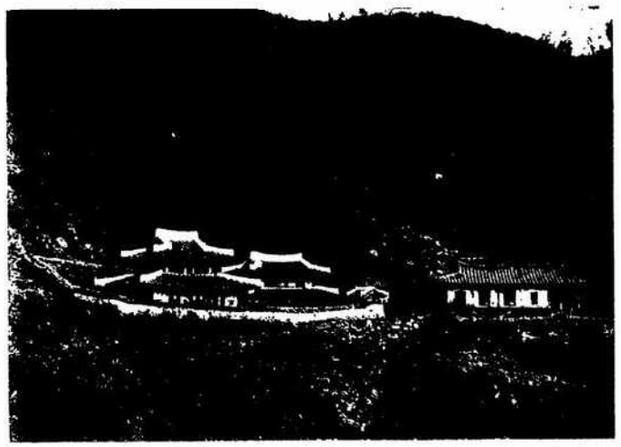
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

朝鮮史のしるべ

實錄は三代太宗の時、河崙等によつて一度撰進されましたが、世宗の末年再び鄭麟趾によつて改修され、漸く出來上り、二代定宗實錄及び三代の太宗實錄は、世宗の初年に成りました。この三代の實錄が定稿に至つたといふことは、深い意味のあることで、これによつて李朝開國の大業また創業の精神は後代に明示されたわけです。今後實錄は李朝末期の哲宗實錄に至るまで、代代の重要な責務として繼續編修され、而もそれは一部でなく、はじめ四部を書寫また印刷して、王都(春秋館)の外、星州、全州、忠州の三箇所に史庫を設けて奉安し、永存を期し、後には五部印刷となり、王都、江華、慶尚北道太白山、江原道五臺山、全羅北道赤裳山の五箇所に分置され、今日李朝の歴史を研究する人人にとつて最も整つた根本史料とされてゐます。 總て約千七百卷、千二百冊。

次に擧ぐべきは前朝即ち高麗四百七十年の歴史の編纂です。前朝の歴史を編むことも、また支那古來の通例となつてゐます。高麗仁宗朝に新羅、高句麗、百濟の三國史記が編まれたやうに、高麗の歴史については、李朝太祖の時か





慶尚北道太白山史庫全景

ら著手され、先づその末期即ち恭愍王から恭讓王までの實錄を編してそれ以前歴代の實錄に加へ、ついで體裁を改めた「高麗全史」の編纂となり、それは世宗甍去の翌年(西暦一四五一)出來上りました。今世に行はれてゐる「高麗史」一三九卷がこれです。その翌年に「高麗史節要」三五卷が出來上りました。かく、王朝が變つて早早に前朝の歴史が編まれたことは、文獻の保存と整理に於いて、幸なことでありましたが、その一面には王朝更迭の際に於ける事實を、新王朝の立場から明記して置く必要にも基いたものでありませうから、かの李朝初期三代の實錄の編修と相表裏して、李朝開國の思想的根柢を示すものであります。

第三はやはり世宗朝に撰進された朝鮮八道の「地理志」です。地理書の編纂が實際の政治の基本的知識を明かにすることはいふまでもないことで、山林田野の廣さ、人物の出自、水陸運輸の經路などを知ることは爲政者の切實緊要のことであり、更にそれらの各種各方面の記述を一部の書物としてつくり上

げることは、社會の安定、人民の定著、租稅徵收の公當をはかるためのものでもあります。世宗朝に半島全部にわたる統一的地理書が出來上つたことは、謂れ深いことです。それは世宗六年に著手、十四年に至つて尹淮・申檍等によつて一旦編成され、後に一部分增補、世宗實錄附錄の地理志となり、更に數年の後には詩文などを加へた『東國輿地勝覽』(五五卷)として大成され、これは其後數回の改修を經て『新增東國輿地勝覽』として現存してゐます。所謂朝鮮八道の制は、この書によつて最もはつきりと見ることが出來、現在の十三道制が、ここに淵源することは、八道の名によつても、容易に知られませう。

| | (牧) | (大都護府) | (郡) | (縣) | (驛) |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 京畿 | 一 | 四 | 七 | 一九 | 五 |
| 二 忠淸道 | 〃 | 四 | 〃 | 一一 | 三九 |
| 三 慶尙道 | 一 | 三 | 一 | 七 | 九 |
| 四 全羅道 | 一 | 二 | 一 | 一五 | 四〇 |
| 五 黃海道 | 二 | 四 | 七 | 一一 | 五四 |
| 六 江原道 | 一 | 一 | 五 | 七 | 一二 |
| 七 咸鏡道 | 一 | 一 | 二 | 四 | 二 |
| 八 平安道 | 一 | 三 | 一 | 八 | 一三 |
| (計) | 五 | 一九 | 四 | 四五 | 八一 |
| | | | | 一七六 | 八五 |



第四は法典の完成です。このことも既に太祖の時にはじまり、先づ經濟六典となり、次次に下される新條令はその改正增補を促がし、太宗・世宗・世祖朝、幾度かの修正事業は相ついで行はれ、次代睿宗元年西暦一四六九に至つて、その功を終へ、翌年經國大典(六卷)として頒布され、李朝の制度典章の大本はここに樹立されました。大典は吏・戶・禮・兵・刑・工の六典に分れ、それはさきの經濟六典以來の編成樣式を襲踏したものですが、更に溯れば唐六典、近くは明會典などの支那法典にも基づくものです。從つてその禮典の如き形式を重んずる部分の外は、前朝來の習慣法を整理立條したもので、半島社會の實情に卽した

ものでした。故に今後永く祖宗の遺制として政務の原則とされ輕輕しく改廢することを許さず、改正に當つては嚴密なる手續を必要としました。

かくの如き書物の編纂と密切の關係ある印刷術に關しては高麗末にはじまる活字の使用が盛んとなり、太宗世宗の間に銅活字の鑄造されたもの總數數十萬といはれ、有名な朝鮮活字の基礎をなしました。我が國の慶長活字の母體はこれです。

更に廣く初期の文化全體を考へますと、文學美術工藝と、各方面に著しい遺品遺作をあげることが出來ますが、中でも最も一般的な、朝鮮文化史上劃期的一大事ともいふべきは、國字卽ち諺文の創作でありませう。

諺文とは、ローマ字などと同じく單音文字で、世宗の二十八年(西暦一四四六)に、訓民正音として公布されました。最初は母音子音合せて二十八字から成つてゐましたが、其後二三の變遷あつて、現在は母音十一字、子音十四字、計二十五字でこの組み合せによつて自由に朝鮮語が書寫されるのです。



蓋しこの當時までの書寫は、公には漢字漢文を以てするを正式としたこといふまでもありません。漢字を用ひ、その音や訓を借つて、朝鮮語をそのまま寫す法も、既に新羅一統時代から行はれてゐますが、漢字を脱却し得ない限りその普及性は甚だ乏しいとせねばなりません。我が國では早くも奈良時代に假名の創造が見られ、國民文學の勃興を促しましたのに比ぶれば、朝鮮に於ける諺文の發明の、餘りに遲きに驚かざるを得ませんが、然しとにかくここに、それが公布使用せしめられたことは朝鮮文化史上、實に空前のことといはね

| 母音 | 音 |
|---|---|
| ㅏ | a |
| ㅑ | ya |
| ㅓ | ŏ |
| ㅕ | yŏ |
| ㅗ | o |
| ㅛ | yo |
| ㅜ | u |
| ㅠ | yu |
| ㅡ | eu |
| ㅣ | i |
| ㅐ | ä |
| ㅒ | yä |
| ㅔ | e |
| ㅖ | ye |
| ㅚ | ö |
| ㅟ | ü |
| ㅢ | ui |

| 子音 | |
|---|---|
| ㄱ | k,g |
| ㄴ | n |
| ㄷ | t,d |
| ㄹ | r,l |
| ㅁ | m |
| ㅂ | p,b |
| ㅅ | s,t |
| ㅇ | ng |
| ㅈ | ch,j |
| ㅊ | ch' |
| ㅋ | k' |
| ㅌ | t' |
| ㅍ | p' |
| ㅎ | h |

| | | |
|---|---|---|
| 달 | (tal) | 月 |
| 비 | (pi) | 雨 |
| 아이 | (ŏ-mi) | 母 |
| 사람 | (sa lam) | 人 |

ばなりません。さうしてこの諺文の源流については、古篆說象形說梵字說西藏文字說蒙古文字說など數說あつて未だ定說をみないのですが、前後の歴史事情から推して考へれば、蒙古文字說、卽ち蒙古文字にならつて造り出だされたとする說など、最も考へられ易いところであり、またたとへ直接さういふ系統をひくものでないとしても、かかる文字を造り出ださうとした氣運そのものは、やはり高麗末以來の元との頻繁な交通往來、それから受けた刺戟が大いにあづかつて力あるものではあるまいかと思はれます。

諺文の制定公布がもたらした第一の結果は、民意の暢達、文化の普及にあることいふまでもありません。そのために却つて爲政者の保守的な人人は諺文禁止の意見さへ出したことがあります。

李朝の國本ともなるべき工作は、かくの如くして行はれかくの如くして堅められましたが、然し一般民衆の生活は、また何を基準として統制され、何を中心題目として規範されたでせうか。



## 一九　佛教と儒教

李朝に於ける民衆の生活基準を考へる人は、佛教に對する儒教を思ひ浮べるでせう。なるほど佛教が高麗の國教であるとすれば、儒教は李朝の國教といへます。けれどもこの佛教から儒教への轉換は、單なる民衆生活の問題といふことは出來ません。それは先づ政治的社會的問題でありました。

高麗の佛教は、その初期から國家鎭護の功德を認められ、寺院はことさらの加護を受けましたので、新羅中期以來の貴族佛教的傾向は愈〻發揮され、上下の衆祟をあつめ、それに伴ふ經濟的實力は甚だ增大されました。經濟方面のみを主としてみれば、寺院は田土と奴婢とを擁して、一般貴族と同一の性質を持つてゐたことがわかります。

かかる政治經濟兩方面に於ける特權と實力とは、然し高麗四百數十年の經

過のうちに、佛教の健全なる信仰思想の發達を阻害して、僧侶の墮落となり、遂には識者の排佛論を起しました。佛教の精神的頽廢があらはになれば、その物質的實力が爲政者の注意の的となるのは當然なことです。

李朝の建國に際しては、前朝の王室貴族の田土奴婢が、新王朝をとりまく重臣たちの所有に置きかへられたとともに、寺院のそれらも亦た多大の變動を受けねばなりませんでした。太祖は先づ度牒の制といつて、僧侶になるには官の許可を必要とし、その許可を受けるためには規定の税を官に納めしめて僧侶の數を制限し、次には新しく佛寺を創營するを禁斷し、從來の僧侶といへども資格に缺けるものは普通人となして國役に從事せしめました。ついで太宗は一歩をすすめて、中央地方の寺院に一大斧鉞を加へ、殘存するものは曹溪宗、總持宗合せて七十寺、天台宗、疏字宗、法事宗合せて四十三寺、華嚴宗、道門宗合せて四十三寺、慈恩宗三十六寺、中道宗、神印宗合せて三十寺、南山宗、始興宗各〻十寺、合せて十二宗二百三十二寺とし、同時に寺田奴婢の數を寺格の上下に



從つて規定し、他はみな官に没收しました(太宗六年)。

この方針を一層徹底せしめたのは世宗で、諸宗の分立を禪教二宗に統合し、寺院を整理して僅か三十六寺の本山に減縮し、それにともなつて寺田奴婢の數も著しく減少されました(世宗六年)。

寺院に對する抑壓制限の次第は、大略かくの如きものでありましたが、またひるがへつて思ふに、いかに佛教の精神的實力が頽ちた當時とはいへ、個人の信仰そのものまでが消失するものではありません。否な王朝變革の際の如きは、却つて無形絶對の力を希求する慾欲の強いものがあります。それは一般民衆に於いては勿論、爲政者自身にもあらはに認められ、太祖の如き表面抑佛策の鋒を示したにかゝはらず、一個の人間としての内面生活には、佛教の信仰を斷念することは出來なかつたのであり、同樣のことは世宗にも世祖にも認められます。從つて李朝の佛教も一概に抑制のみの歴史ではありません。

然し大本は既に決して居り、今後多少の張弛はあるといつても、高麗時代のそ

れに比すれば勿論いふべき程のものではなく結局佛教は半朝のものではありません。

然らば佛教に代るものは何であるか。それは儒教です。廣い意味の儒教は、既に三國時代から半島に傳來してゐたのですが、ここに謂ふ儒教は、隋唐五代を經て宋に至つて、思想として大成された儒教を意味します。從つて宋儒の大宗とされる朱子の建設した儒教、普通に朱子學といはれるものに外なりません。

朱子の思想は南支那に成立し、元の南北統一とともに北支那に傳はり、その大都北京に流行しました。恰かも高麗は元に服屬して國王世子以下朝臣の、大都に往來繁き時でありましたし、特に元の科舉卽ち官吏登庸試驗に朱子の學說を採用し、高麗人の應試が許されたことが、その學の半島輸入にあづかつて力あつたことと思はれます。高麗では元の制度にならつて科舉の制を改め、國學を復興し、儒教興隆の端はここに既にあらはれてゐます。



朱子學そのものの中に、排佛思想を多分に含んでゐる上に、當時高麗の佛教界は、さきに述べた如く、それ自身排擊されるに充分なものがありましたから、朱子學が社會に普及されるには恰好の時であり、恰好の說でした。それのみでなく、爲政者は寺院改革と相表裏して、朱子學＝儒教を國教とし、文武兩科にこれを課し、中外の學校を充實し、その盛行に努力しました。それは他面國初の思想刷新と思想統一とを目標としたものであつたでせう。

儒教の任務は、右の如き思想方面の外に、實際社會生活の統制にもあつたのです。高麗時代には、公私の儀式祭祀は殆んど佛教の方式によつて行はれましたが、今やそれに代るものとして儒教の禮が採り入れられるに至りました。さうして禮の最も具體的な基本とされたのが、文公卽ち朱子の著作といはれる文公家禮です。家禮は謂はば士大夫の冠婚喪祭に關する規定で、その根本精神は家族制度の確立といふことにあります。それは家廟を中心とする祖先崇拜から出發するものですが、その履行は內に於ては嫡出庶出の差別を嚴

にし、外に對しては同姓異姓の區別から階級の上下をまで分つもので、佛教の平等無差別觀に對して、これは全く差別觀に立脚するものといひ得るであり ません。家禮を奉行することが出來るといふことは、從つて兩班階級の特權の一つでさへありました。然しそれは一般庶民に模倣されその生活の一部に採り入れられ、今日に至るまで多方面にその名殘を留めてゐるのです。しかも一歩退いて考へると、禮はややもすれば形式に流れやすきものであり、儒教は儒學ともいはれるやうに知識や義理を尊重し過ぎる弊があります。政策的に採用奬勵された李朝の家禮また儒教は、この點に於いて民俗を形式化し、民心を輕薄ならしめた恨みがすくなくありません。更に心の慰安とか靈の救濟とかいふ個人の內面生活に至つては、この新しい規範は前代の佛教の力に及ぶべくもなかつたのです。佛教寺院が、政治上抑壓され、思想的には退化不純化を餘儀なくせられながら、なほその命脈を保持して現代に至つた所以の一端は、かかるところにも考へられ、また一般民衆の信仰が陰濕に趨いて、



巫覡のはびこるに至つた理由も、これらの點に求められるでありませう。

ひるがへつて儒教の今後に於ける推移をみるならば、それは學問や思想の統一には或はある程度の效果をあげ得たかも知れませんが、統一はやがて固定となり、固定は腐敗を導き、謂はば自己分解や酸醉にまで進まねばやみません。それはやがて王位や政權をめぐる朝臣間の氣轢と合流して所謂黨論にまで發展し、李朝の後半約三百年近い間の政治社會をいろどるのです。

## 二〇　朋黨の爲

所謂黨論の前驅をなす事件は、第十代燕山君の世に起つた朝臣間の內訌に認められます。しかもそれは王位繼承問題に直接關係あることですから、こに太祖以來の繼承がいかなるものであつたかを先づ通觀してみませう。

太祖は卽位の翌年、その愛する繼妃康氏の所生の芳碩を立てて世子としま

したが異母兄多かつたので、重臣鄭道傳は他日變あることを慮り、事に托してそれらの諸王子を除かうとしました。ところがその謀が洩れて、王子芳遠は世子ならびに道傳を殺害して、兄なる芳果を推して世子とすることを父王に請ひました。太祖はこれに從ひ、ついで位を芳果(定宗)に讓り、その後十年の間はなほ太上王として生存しました。定宗は在位わづかに二年にして弟の芳遠(太宗)に讓り、太宗の子世宗を經て、文宗が立ちましたが、また二年にして薨じ、世子は年十二歲を以て位につきました端宗。

太祖卽位後六十餘年、王廷はこの幼主端宗を迎へて、甚だ危くなりました。王の叔父首陽大君は、前王の遺命によつて王を補佐した皇甫仁、金宗瑞などの重臣を除き、遂に讓りを受けて自から王となりました(世祖)。さうして成三問、朴彭年等が、上王卽ち端宗の復位を謀つて居ることを知ると、成三問以下關係の人人七十餘人を殺し、上王を降封して魯山君となし、江原道寧越に移し、ついで死を賜ひました。世祖の子睿宗は在位一年にして薨じ、その子成宗つぎ、そ



の治世は二十五年の長きにわたつて、治績も大いにあがりましたが、その次に立つた燕山君は、素行收まらず、失政が多かつたのです。時に世祖が王位を簒奪した折に功あつた武人韓明澮及びその一族は重んぜられ且つ王室と外戚關係を結んでからは、外戚專權の弊を生じました。それに對して前王成宗に重用された金宗直の一派は、非常に義理をやかましくいひ、黨同伐異の風を持する新進氣鋭の政治家に滿ちてゐましたので、兩者は自然相容れぬ立場に立ちました。さうして燕山君四年戊午、早くも世祖卽位の事情に關する史論問題を緒として、抗爭は表面にあらはれたのです。

一體金宗直の學系は、高麗末稱王昌王の二代に仕へて門下注書の官にあつた人に吉再冶隱といふ儒者があり、この人に始まるとされてゐます。吉再は二王が弑せられると官をすてゝ慶尙道善山郡に引退し、子弟をあつめて專ら力をその教養につくしました。その門人金淑滋は郡吏の子でしたが、世宗に召されて一代の學者となり、金宗直はその子です。宗直の門下には金馹孫、金

宏弼姉汝昌以下多數の名士が輩出して當時一大勢力をなし、この派は朝鮮派に對する理學派ともいはれ朱子流の道德的批判を强調するに得意でした。

それで燕山君四年の事件は、宗直の弟子金馹孫が嘗て世祖を誹謗する史論をしたといふことを表面の理由として、その一派のものを或は殺し、或は流罪に處したのです。戊午の士禍。同王十年甲子には、更にその殘黨が一掃されこれを甲子の士禍といひます。

燕山君が廢せられて中宗が立つと、金宗直の學派の趙光祖等を信任し、光祖また大いに王のために劃策して儒者政治の本領を發揮しましたので、王はやがて彼等の態度に不滿を持つに至り、これに乘ずる反對黨は中宗十四年己卯、起つて一擧に光祖等を一網打盡し、理學派の勢力は敗滅に歸しました。己卯の士禍。然し朝臣の內訌はここに終結したわけでは勿論ありません。中宗の次の仁宗が在位わづか八箇月で薨じ、その弟明宗が十二歲を以て位につくと外戚尹任と尹元衡との爭權は激化し、理學派はまたもその禍中に投ぜられて



尹任の黨と目せられ乙巳の士禍明宗卽位の年となりました。しかし明宗の末年に及んで、乙巳以來政柄を恣にした尹元衡が歿すると、理學派復活の兆し見え、王は綱紀を振肅し、山林の士(理學派)を登庸しようとしましたが、實現に至らないで王も薨じました。朝鮮第一の儒宗とされる李滉退溪)や李珥(栗谷)は、何れもこの頃の人です。

ついで立つた宣祖は理學派の新進を擧用して要路につけましたが、その目ざす理想的主張は當路の大臣の守舊的態度と相容れず、またしても新舊の軋轢となります。所謂士禍時代は理學派とその周圍との衝突でしたが、今や抗爭は理學派同志の中で行はれ、次第に深刻を加へて行きます。たまたま明宗王妃の弟なる大司憲沈義謙と、さきの尹元衡の親戚で、金宗直派の學流をくむ吏曹銓郎金孝元とが、一方は門地と高職により、他方は才氣と文名とをさうして銓郎といふ內外官の除拜を專らにする要職とによつて榮達を求める人人を周圍にあつめ、互に勢を張るに及んで、沈金のたわいもない個人的確執は、漸く

李朝の壺（鐵砂繪菊文）



黨爭にまで發展し、義謙の派を西人といひ、孝元の派を東人と稱しました。其後、東人は分れて南人、北人となり、これを西人と合せて三色と呼びます。

凡そ何れの國、何れの時代にも、政治家の黨派爭ひはあるものですが、李朝史は黨爭の歴史である」とまでいはれるのには、また謂れあることで、宣祖のはじめ東西分派が見られた後も、二は三となり、三は四となつて、而も遂に一國の衆を擧げて三百年の久しきにわたり、脈脈としてその系統を傳へて今日に至り、正邪順逆のけじめは、辛に明言為し得ず、互に他を排して相容れないといふことは、類例稀れなことでなければなりません。さうしてかかる朋黨の原因については、古人の說に、一道學の太重、二名義の太嚴、三文詞の太繁、四刑獄の太密、五臺閣の太峻、六官職の太濶、七閥閲の太盛、八承平の太久、以上八ッの事實が擧げられてゐますが、それは必ずしも原因ばかりではなく、半はむしろ黨爭の結果とすべきものでありませう。然し結局は王權の微弱といふことが根本的と土臺となつたのであつて、朋黨の脈絡ある發展は朱子學の單一なる思想

に踏躇して、一歩も外に出ることと出來なかつたからに由ると思はれます。

## 二一　文祿慶長の役

燕山君戊午の士禍甲子の士禍中宗己卯の士禍と相つぐ政爭は、宣祖の初年に至つて朋黨の分立、所謂黨論にまで發展して、國運の不振は顧みられなくなつた時、我が豐臣秀吉の軍勢は、海を渡つて釜山浦の海上にあらはれ、半島朝野の眠りを呼び起しました。所謂壬辰の役です(西暦一二九二)。

さて成宗中宗仁宗明宗四代はおたかも我が應仁文明から永祿に至る所謂戰國時代に相當します。永祿につづく元亀、天正の間、我が國は織田信長によつて天下統一の緒につき、それは秀吉に及んで一層進捗し、海外經路の企圖にまで發展しました。卽ち天正十四年(宣祖二十年)秀吉は九州征伐の準備中早くも大陸遠征を決意し、朝鮮を經由して明國に入らんと、命を對馬島主宗氏に

通じました。宗氏は翌年、九州薩摩の陣中にあつた秀吉に使を遣はして朝鮮をして調物及び質子を出さしめんことをはかりましたが、秀吉は朝鮮國王自からの入朝を交渉せしめました。島主は朝鮮と事を起すことは死活にも關する問題ですから、自から渡海して折衝を重ね、漸く通信使を伴ひ還つて關東、奥羽の征伐から凱旋した秀吉に謁し、日本統一の賀を致さしめました。時に天正十八年です。秀吉はその使者に對して明國遠征の意圖を告げ、朝鮮國王に嚮導すべきを傳へしめました。

その翌年愈〻出兵の準備を命じ、諸將の部署を定め、本營を肥前名護屋に置いて自から鎮し、翌年(文祿元年)三月を以て出陣の期としました。然るに嚮導の命に對する回答は、宗氏の努力も甲斐なく、その要領を得なかつたので、部署に多少の改定を加へて渡海せしめ、ここに征明軍は征朝鮮軍となりました。

總軍十五萬八千七百人、それは第一軍から第九軍に至る九軍に分れ、別に舟奉行海軍が附屬してゐます。



かくて第一軍(小西行長)は文祿元年(宣祖二十五年)四月十二日釜山に至り、翌十三日上陸して釜山城を陷れ、翌日東萊を取り、第二軍(加藤清正)は十七日に釜山上陸、第三軍(黑田長政)は十八日に金海上陸、諸軍相ついで渡航、第八軍(宇喜多秀家)が釜山に落いた五月二日には、第一軍第二軍は、早くも京城を占領して居りました。

是より先き、朝鮮王廷では、我が軍來るの報俄かに至り、諸城相ついで陷落しましたのに措置を失ひ、四月二十八日忠州の敗報を受けるや、國王宣祖は遂に都を棄てて北に逃れ、五月八日平壤に入り、途中王子順和君を江原道に、臨海君を咸鏡道に遣はして兵を募らしめました。

その後我が軍は相ついで京城に入り、諸將は議して分擔を定め、朝鮮八道の經略に當り、秀家は京城に駐屯して統制を圖り、諸軍は力めて人民を安堵せしめ、到るところ告示して、行軍の目的が「道を朝鮮に假つて明國に入る」に在る旨をさとし、歸順をすすめ、その常業に勤ましめました。同時にまた政令を布き、

租税を徴收して兵糧の支持に備へたのです。

行長は平安道經略の任に當り、進んで平壤を陷れ、國王をして更に北は義州に遷らしめ、清正は咸鏡道に向ひました。さうして會寧に於いては、土官が順和、臨海二君を捕へて軍を迎へ、清正はこれを受けて勞ひ禮遇を加へ、進んで豆滿江を渡り兀良哈の地、今の間島地方に入り、大いに武威を輝かしました。他の諸軍もまたそれぞれ經略をすすめましたが、ただ水軍は朝鮮に名將李舜臣なるものあり、我が諸將間に一致をかいだこともあり、加へて西南多島海の水路の知識にくらく、屢々利を失つたのです。

時に秀吉は、名護屋に在つて半島の軍務を指揮し、京城占領の報至るや、直ちに日本・朝鮮・明の三國の處置を考へ、命を下して明年入明の計をなさしめ、自分みづから渡海して軍の統制に當らんとし、數次その期日まで定めましたが、遂に果すこと出來ませんでした。

他方明にあつては、その服屬國たる朝鮮の危急を聞き、朝鮮の請ひに應じて



救援軍を出すことになりました。即ち是歳七月明の將軍祖承訓は、遼東より來り、平壤の我が軍を攻めましたが、敗れ還りました。そこで明は、特に沈惟敬を以て媾和の使者となし、我が攻鋒をゆるめ、且つ我が情勢をうかがはしめたのです。惟敬は、平壤に於いて行長と交渉し、回つて明廷に和を唱へましたが、經略宋應昌は新たに命を受けて軍を備へ、提督李如松を將として翌文祿二年正月、再び平壤を攻めたのです。行長は終に利あらず、城を棄てて南下し、如松は追撃しましたので、小早川隆景等は、死を決してこれを碧蹄館(京城の西北約五里)に迎へ撃ち、大いにこれを破りました。

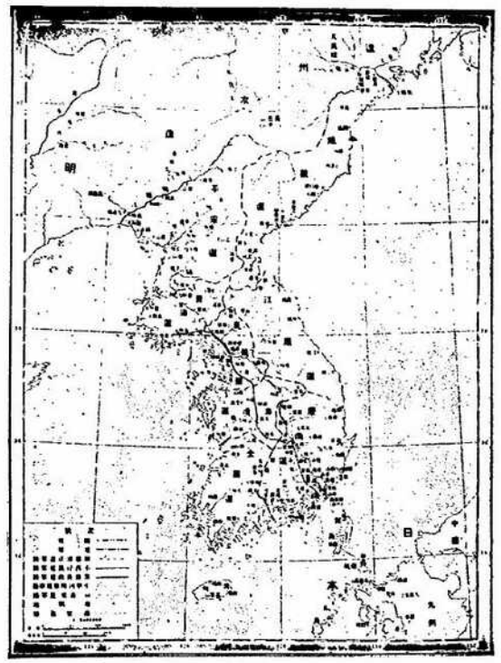
然るに既に明の救援軍來つてより、半島各地には、民兵即ち義兵が蜂起し、我が軍はその鎮定に苦しみました。ここに沈惟敬が再度來り媾和の交渉は京城にて行はれ、行長はまたその衝に當り、その交渉した條件は、明より媾和使節を派遣すること、明軍の撤退、我が軍の京城撤去、順和臨海二君の還付等であつたらしいのです。これにもとづいて明將宋應昌はその部下二人を媾和使に

朝鮮史のしるべ

仕立て沈惟敬とともに來らしめましたので四月十八日我が軍は撤兵を開始し、その所謂講和使は、五月中旬行長に伴はれて名護屋に來り、秀吉に謁しました。この時秀吉が交附した講和條件は、(一)明帝の女を迎へて我が后妃に備へること、(二)官船商船を通じ往來せしめること、(三)日明兩國の大臣が誓詞を交はして通好を誓ふこと、(四)朝鮮の四道を我が國に割讓し、他の四道及び京城を朝鮮に還附すること、(五)朝鮮の王子及び大臣一二人を質とすること、(六)順和臨海二王子及び僚屬を還付すること、以上の如きものでありました。

然るにこの交渉に當つた沈惟敬及び小西行長の家臣小西飛驛守(內藤如安)等は事を急いだので種種中間に小策を弄し、右の趣旨はために徹底せず、却つて明が秀吉を日本國王に冊封し、その朝貢往來を許すことを以て中心問題とするに至り、また朝鮮をして特に我が國のために請封の使を明に出ださしめたことさへありました。





李朝時代形勢圖（西暦一六〇〇）

かくて長慶元年文祿五年九月明の使は大阪に達し秀吉に謁しましたが、それは冊封の使で秀吉を日本國王に封じ諸將に各〻明の官職を授けることを使命とするものであり、秀吉がさきに示した條件は履行されてゐないので、和議はここに破れ當時既に歸國してゐた加藤清正黑田長政等をして再征の準備を整へさせ明くる慶長二年二月を以て出兵の期としました。清正はその期に先立つて正月十三日蔚山の西生浦に入り、行長はついで熊川に渡り、ここに慶長役は起りました。二月二十一日秀吉は再征軍を部署し、總勢十四萬一千四百九十人、八軍及び南鮮諸城守備隊より成り、慶尙道より進んで全羅道を攻略し、以て忠淸道其他に及ぼし、且つ沿岸の要衝に城を築いて、さきに示した媾和條件を徹底せしめようとしました。これに對して明はまた朝鮮の請ひに從ひ、水陸兩軍を出しました。

明軍は南下して、先づ淺野長慶の守つてゐた蔚山城を包圍しましたので清正は直ちに入つて應援し、ここに有名な蔚山籠城十二月二十二日から翌年正

月四日までは行はれたのです。時に毛利秀元の來援あつて明軍は敗走しました。然し明の水陸軍は更に加はり、續續南下して蔚山から泗川順天の方面にかけて各地に戰鬪は行はれ我が軍も前役のやうな戰蹟を擧ぐるを得ぬ有樣にありました時、はからずも秀吉は病を獲て薨じ慶長三年八月十八日遺命して出征軍の撤退を命じました。この時恰かも島津義弘は奮戰して明の大軍を泗川に潰滅せしめた時で、これを機として兵を班し諸將相ついで凱旋しました。その時小西行長は明將と交渉し、質を交換し、なほ後日朝鮮から使を遣はして和議を講ふべきことを約しました。

かくて前後七年にわたる半島の兵火は、一先づ收まつたのですが、この役秀吉の期待したところは遂に達せられなかつたとはいへ朝鮮明をして我が國に對する認識を深かからしめ、内にしては國民の海外發展の氣風を刺戟したこと頗る大であり、典籍の將來、陶工の歸化など學問工藝の諸方面に影響したところすくなくないことは、つとに知られて居ることです。



朝鮮にとつては國の米倉ともいはれる南部諸道に於いて兵を被ること七年にもわたり、殊に我が軍の撤退後も明軍は久しく駐屯し誅求をほしいままにしたことを思へば、いふまでもなく大なる國の災でありました。外難も程度と場合によつては却つて國力の進展を促がし、民心の沈滯を破つて覺醒更生に資せられること、多多認められますが、當時の朝鮮にとつてのこの七年戰役は、かかる刺戟としては餘りに强きに過ぎるものではなかつたかの感がします。然しまたこれによつて、半島の政治社會各般種種な方面の進路方向の改められ、轉ぜられたものもすくなくなく、この戰役の全體的な史的意義は今後なほ追求せらるべき問題でありませう。

なほ朝鮮の宗主國として救援の大軍を派遣した明は、既に國力衰退してゐた際であり、これによつて愈〻財政困難を加へ、滅亡の一因をなすに至つたのです。さうしてその反面の事實は、當時漸く勢を示してゐた滿洲の勢力＝今の奉天の東方興京附近を本擧とした建州衛女眞の酋長奴兒哈赤（ヌルハチ）の勃興を導

いたのです。この七年戰役の最も大なる結果は蓋しここにあります。

## 附　役後の我が國との關係

我が撤兵に際して小西行長と明將との間に約せられたところの和議を調へる朝鮮の使者は、其後久しく來りません。慶長五年宣祖三十三年西暦一六〇〇九月關ヶ原の戰によつて德川氏の天下となりますと、朝鮮の意向も漸く好轉し、對馬の領主宗氏はまたその前後、自領の經濟上、朝鮮との通商の一日も早く復舊することを願望して、極力修交につとめましたので、遂に慶長十二年朝鮮修交使節は來聘し、國交ここに復し、其の後將軍の代る毎に慶賀使を送ることとなり、翌年には宗氏と朝鮮との間に條約を結び、以後江戸時代を通じて、宗氏は朝鮮貿易の權を獨占します慶長條約、己酉約條。

右の慶長十二年の使節來朝以後江戸時代三百年を通じて前後十二回朝鮮



使節（通信使）は我が國に遣はされました。いま左にその年次、使命などを表示して說明にかへませう。

| （年代）（日本） | （朝鮮） | （正使） | （使命） | （總人員） |
|---|---|---|---|---|
| 丁未　慶長一二 | 宣祖四〇 | 呂祐吉 | 和好を修む | 四六七 |
| 丁巳　元和　三 | 光海君九 | 吳允謙 | 大阪平定、日域統合の賀 | 四二八 |
| 甲子　寛永　元 | 仁祖　二 | 鄭　岦 | 家光襲職の賀 | 三〇〇 |
| 丙子　寛永一三 | 仁祖一四 | 任　絖 | 泰平の賀 | 四七五 |
| 癸未　寛永二〇 | 仁祖二一 | 尹順之 | 家綱誕生の賀 | 四六二 |
| 乙未　明暦　元 | 孝宗　六 | 趙　珩 | 家綱襲職の賀 | 四八〇 |
| 壬戌　天和　二 | 肅宗　八 | 尹趾完 | 綱吉襲職の賀 | 四七〇（分府は一一三） |
| 辛卯　正德　元 | 肅宗三七 | 趙泰億 | 家宣襲職の賀 | 五〇〇（分府は一二九） |
| 己亥　亨保　四 | 肅宗四五 | 洪致中 | 吉宗襲職の賀 | 四七五（分府は一二〇） |
| 戊辰　寛延　元 | 英祖二四 | 洪啓禧 | 家重襲職の賀 | 四七五（分府は八三） |
| 癸未　寶曆一三 | 英祖三九 | 趙　曮 | 家治襲職の賀 | 四八〇（分府は一〇九） |
| 辛未　文化　八 | 純祖一一 | 金履喬 | 家齊襲職の賀 | 三三六（對馬にて聘禮） |





アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

朝鮮史のしるべ

次に對馬の窮占に歸したといふ通商貿易は、いはば朝鮮から對馬の物資缺乏を補給してその生活を安定させ、島民の渡海して不法行爲に出るを防ぐといふことを第一義とし、彼我國用の有無相通ずることを第二義とするものです。さきの己酉約條によれば、宗氏は毎年米百石を受け、二十隻の歲遣船を出すことを定められ、舊により釜山浦が唯一の港として開かれ、其處には客館たる倭館を設けて應接のところとなし、宗氏は代官を駐在せしめて貿易の事務を處理させました。倭館は役の直後には一時釜山港外の絶影島に置かれてゐましたが、己酉約條成立してより釜山鎭城の南豆毛浦今の水昌洞に新設され、七十年の後ち肅宗初年草梁に移され、以後二百年明治初年まで續きました。

貿易品はほぼ戰役以前と同じく、我が國からは國產の銅鐵オランダ船などによつて輸入した蘇木(染料)水牛角胡椒などを主とし、朝鮮からは米大豆木綿人蔘藥材などを以て交易しました。さうしてかかる通商關係は明治維新に至るまで繼續され、ついで一般外交管轄とともに外務省の所管となるので



あります。

## 二二　明・清の際

宣祖の初年にあらはれた王廷の朋黨は、南人、北人、西人の三派に分立して我が軍に直面したことは、さきに述べたところです。前後七年にわたる戰禍は內部に於けるこの朋黨の爭ひに如何なる影響を投じたでせうか。

黨人はこの大なる危機に際しても、その黨色から脫すること出來ず、國論は常に動搖して歸一することありませんでした。宣祖についで立つた光海君は西人のために廢せられて仁祖が擁立せられ、王室は全く黨爭の具と化し去つたのです。この仁祖の卽位後數年にして朝鮮にとつての第二の外難は至りました。卽ち五年丁卯(西暦一六二七)に於ける清國軍の入攻です。

清の太祖奴兒哈赤が、はじめて兵を滿洲興京附近に擧げたのは、宣祖の十六

朝鮮史のしるべ

年(西暦一五八三)の頃でしたが半島動亂の間次第に勢を張り、北滿洲から間島方面一帶居住の女眞人を從へ、光海君八年(西暦一六一六)の頃には國號を定めて後金と稱し、やがて明と薩爾滸山に戰つて大勝し瀋陽(奉天)遼陽を略し、遼東地方を盡くその掌裡に收め、瀋陽に都を遷して遼西の經略に著手しましたが、そのこと未だ成らずして太祖は歿し、太宗が位をつぎます。

薩爾滸山の戰の折、朝鮮は明の命に從つて兵を出し、明軍と策應して南方から兵を進め、戰敗れるや元帥姜弘立・副元帥金景瑞はともに後金に降りました。これより後ちは、後金に對して向背を明かにせず、密かに形勢をうかがひましたが、明に對する尙慕の念は、おのづから朝鮮をして明に歸向せしめました。

ここに後金の太宗は、即位の翌年(丁卯)を以て兵三萬を朝鮮に入れ、南のかた明を攻むるに先立つて、背後の固めをしようとしたのです。金軍が黃海道平山に至るの報を聞いて、仁祖は江華島に難を避け、使を出して和を乞ひ、兩國は、兄弟の約を結び、朝貢の條件を定め、金軍は北に還りました(丁卯の亂)。この後九



年にして後金は國號を清と改めます(西暦一六三六)。

しかるに朝鮮は、その後なほ明に依附する狀を示したので、太宗はみづから大軍を率ゐて來り、京城に迫りました。仁祖は再び江華島に避けんとしてその暇なく王世子とともに廣州の南漢山城に入りましたが、清軍は進んでこれを圍み、仁祖は守城わづか四十五日にして出で降り、明との交を絶つこと、清の正朔を奉ずること、質子を出すこと、清の動兵の際は助軍を出すこと、これまで明に對してとつたと同じき事、大の禮をいたすこと等十數の條件を承認しましたので、太宗は南漢城下に受降壇を設けてその降を受けました(丙子の亂)。受降壇の故地漢江江畔の三田渡には滿洲文・蒙古文・漢文三體の「大清皇帝功德碑」が建てられて今に至り、その當時を物語つてゐます。

その後七年にして、清は遂に山海關を入つて明の燕京(北京)に都を移して北支那を收め、國姓爺に名高い鄭成功など南支那の反抗も甲斐なく、四代聖祖の時はじめには支那全土を統一しました。朝鮮では顯宗の初年に當ります。

朝鮮史のしるべ

南漢城下に服屈の誓をしてから朝鮮は約に從つて毎年冬至正朝聖節歳幣の四行使節を出し、その他臨時に謝恩奏請進賀陳慰進香告訃問安等の使を遣はしました。就中歳幣は、

黄金一百兩　白銀一千兩　水牛角弓面二百副
豹一百張　鹿皮一百張　茶一千包
水獺皮四百張　青黍皮三百張　胡椒十斗
好腰刀二十六把　蘇木二百斤　好大紙一千卷
順刀十把　好小紙一千五百卷　五瓜龍文席四領
各樣花席四十領　白苧布二百匹　各色綿紬二千匹
各色細麻布四百匹　各色細布一萬匹　布一千四百匹
米一萬包

といふ巨大なものです。間もなく四行使節は一行に併されて冬至使行となり、歳幣も次第にその額を減ぜられましたが、この強制された義務の形式は幸

漢江三田渡の碑

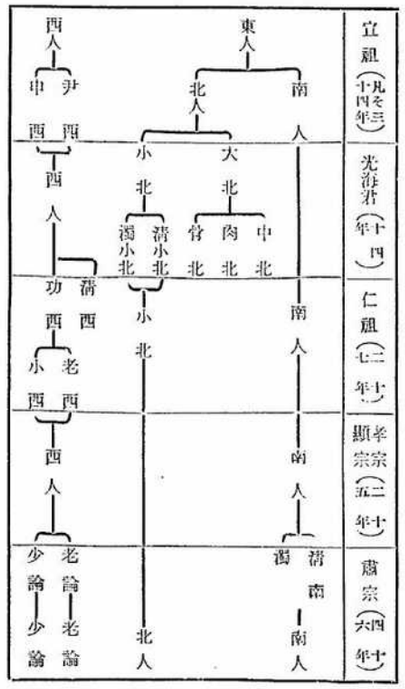
朝末期にまで及んで履行されたのです。しかもその内面亡び去つた明に對する崇敬の思想は現實に於ける反清の感情と相表裏して、李朝後半の思潮をなし、年號の如き、明の最後の年號崇禎を起準として、崇禎後何年といふ數へかたが、永く行はれたこと等はその最もよい例證であります。

## 二三　學問の新傾向

事大關係は明から清へと轉換されても、變らないものはただ黨爭のみ否な黨爭の發展のみでありました。まことに「李朝史は卽ち黨爭の歷史なり」といふ言葉のいつはりでないことを思はねばなりません。黨爭のるつぼの中に、幾多有爲の廷臣は生死し、王權は代を重ねる毎に微弱となつて行きます。いま宣祖以後の黨派の分裂發展を概觀すれば、それは東西分黨以後約百年の間に次表の如き經路を示し、肅宗朝には大略老論、少論、南人、北人の四色を以て匿

朝鮮史のしるべ

別されました。






四色興廢の歴史は一一述べないことにしますが、肅宗以後の中央の政界は、老論少論の爭ひを主流とし、南人は再び表面に立つことは出來ませんでした。宋時烈、尤庵は、忠清道恩津の出老論の首領として記憶せらるべき人、道學文章一世の儒宗でありましたが、肅宗十五年、黨禍を以て死を賜はり、八十二歳を以て全羅道井邑に歿しました。

肅宗四十六年の治世をついだ景宗は、わづか四年にして薨じ、これに續いたのは英祖五十二年、正祖二十四年、合せて七十餘年にわたる時代です。この時代は、さきの世宗朝前後の時代とともに、李朝に於ける二大文運振興期とされます。その根柢は那邊にあるのでせうか。英祖、正祖が何れも好文賢明の王であり、特に朋黨の弊を矯正せんとして、公平なる人材の登用に意を用ひたことは注意せねばなりませんが、より切實な理由を求めると、先づ内には政爭に敗れた南人一派が漸くその生くる途を學問に求め、而もその學問たるや、黨論の根據となつた理學以外に、歴史、地理、制度などの實際的方面に志したことが

考へられます。次には從來兩班でもなく、常人でもない中間の位置に置かれた所謂中人階級と、庶孽卽ち妾の子として、たとへ兩班の子といへども、宗族制度上嫡出子と斷然區別差別されて、特殊の待遇を受けた身分のものが、漸く實力をもつて社會の表面にあらはれた事實を考へねばなりません。中人は譯學・律學・算學・醫學等の實學を以てそれぞれ試驗を受けて官に仕へたものです。

かくの如き、政治的階級的、血緣的に敗者の位地に置かれたものが築き上げた學問が、久しく朱子學の義理名分の論や、些細な禮の論に捉はれた人人のそれと異なるべきは當然のことです。

根柢の第二は外部の影響に求められます。英祖の卽位は、清では世宗雍正帝の初年であり、正祖の末年は仁宗嘉慶帝の初めであります。清朝文運の極盛期とされる乾隆時代(六十年)は、その中間に相當します。前朝明の末には朝鮮の使者に對して極めて狹量な待遇を示して、使節が明の學者などを私に訪問するのを禁じ、書籍の購求すら頗る制限してゐたに對し、清朝になつてから



はそれらの禁防は大いに緩くされ、使節ならびにその隨員一行は、北京に於ける知名の學者に接近し、また書肆に新古の書籍を購つて歸り、清初康熙時代以來興隆したかの考證學の學風は、年毎に半島に傳へられ、その結實は正祖王代に至つて世にあらはれました。

同じ過程を經て、而もやや早く傳來した他の一新要素として特筆すべきものは、西洋學術ならびにキリスト教です。その學術としては、天文・數學・砲術などを主とし、キリスト教は、はじめ宗教としてよりもむしろ理學の一派として研究されたやうで、先づ南人學者として有名な安鼎福・順庵など、それに關する著述を殘して居ります。

學問としてのキリスト教は、やがて宗教として信奉されるに至つて、茲に支那人宣教師周文謨の入鮮(正祖十九年)となりついでフランス人宣教師も來つて南北に流行し、爲政者の禁止・迫害に遇ふこととなります。その第一回は純祖の元年辛酉西暦一八〇一に、第二回は三十數年の後ち憲宗五年己亥西暦一

八三九に、第三回は李太王三年丙寅(西暦一八六六)に行はれます。

以上述べたやうな新氣運、新情勢の具體的表徴ともいふべきものが、正祖の初年、王廷に設けられた奎章閣といふ機關です。これは黨爭に疲れ、黨爭に腐敗した舊來の議政機關から脱却し、また當時大勢力のあつた外戚の專横と權人の掣肘とから逃れ、別個に一新政府を建てたやうなものでした。然し表面は歴代諸王の筆跡著述などを奉安し、内外の古書を蒐集整理して藏するところでありこの古書籍の集大成は乾隆の四庫全書の規模にならつたものではないかと考へられます。さうして奎章閣の實務を擔當する中堅の職は檢書官でありましたが、その最初に任命せられた朴齊家徐理修李德懋柳得恭は、何れもさきに申した庶子の身分のものであり、キリスト教に仆れた南人の學者丁若鏞李家煥等、また正祖の僚屬でありました。

正祖は號を弘齋といひ、その遺作は「弘齋全書」一百冊として殘つて居ります。この全書は、正祖の一個人としての生活内容を示すとともに、その文治政治の

(李朝末の)農　乙　次　男

内面な物語るに雄辯であり、正祖を中心とした當代の政治家文人の傾向をも遺憾なく傳へて居ます。

正祖以後純祖憲宗の間、卽ち對外關係の切迫するまでの五十年は、政治的には頽廢期とされてゐますが、學問に於いては、むしろ正祖朝の氣運が圓熟した時期の感があり、その代表者は金正喜(秋史、阮堂)です。彼は、一代の鬼才といはれ、乾隆の大儒翁方綱(覃溪、阮元(雲臺)に知遇を得、卓拔なる識見を以て經學の堂奥に詣り、新たに實事求是の學を半島に宣布した功を認められてゐます。

## 二四　東洋の開港と朝鮮

正祖の後ち純祖憲宗哲宗三代約六十年は、我が國では文化文政から慶應明治の直前に至る間に相當し、清では嘉慶から道光、咸豐にわたり、歐米人の東洋進出が、漸く著しくなつたことを特色とする時代です。東洋最近世の序幕と

朝鮮史のしるべ

さへいはれる鴉片戰爭の結果、南京條約朝鮮憲宗八年、西暦一八四二によつて清が廣東、福州、寧波、厦門、上海の五港を外國貿易場として開いてから、その趨勢は急に發展し、よれより十二年の後ち、我が國が三百年の鎖國を破つて開港したのも、南京條約に起因するとされて居ます。かかる影響が朝鮮にも波及すちのは必然のなりゆきでなければなりません。

この時に當つて朝鮮では純祖が歳十一を以て位についたのをはじめとして、幼主相つぎ、ためにかの正祖が第一に矯正しようとした外戚專權の勢は、またまた甚だしくなり、師謂戚家世道卽ち外戚にして國政を執ることが續きました。哲宗薨じて李太王が卽位すると、その生父李昰應は、大院君に封ぜられ、世道政治はここにまた一轉します。

大院君は、剛毅果斷の資を以て國政にあたり、大いに人材を登用し、景福宮を再建して權威を示し、醬制度を改革するなど、舊弊の打破に努めました。然しキリスト教の禁壓迫害に於いて、フランス宣教師をも殺したことから、清國駐



割フランス官憲の軍艦派遣となり、江華島はその砲火を受けました。李太王三年。同年またアメリカ軍艦來つて、前年大同江に於いてその國の商船シャーマン號が焚掠されたことの罪を問はんとしました。然し兩國軍艦とも、戰利なくして却けられたので、大院君の排外態度は强化せられかの洋夷侵犯、非戰則和、主和賣國の碑は八道首都に竪てられたのです。

この時我が國は、既に歐米諸國と國交通商の途を開いて居り、この新氣運に乘じて四隣に活動すべきことを主張するものもありましたので、德川幕府はみづから使節を朝鮮に遣はして開港をうながし、前の佛米二國との紛爭をも調停せんとしましたが、未だそのこと實現せずして明治維新となりました。

然しその精神は明治政府に引きつがれ、卽ち維新のはじめ、政府は對馬藩をして朝鮮との外交刷新に盡力せしめ、ついで廢藩置縣とともに、外務省が直接その衝に當りましたが、朝鮮は我が國内に於ける新情勢を理解せず、我が政府との國交續續を承認しませんので、遂にその無誠意を憤り、國内の錯宗した政情

ともからまつて所謂征韓論が起り明治六年九月西郷隆盛以下の辭職となりました。然しこの年の末李太王は成年に達し大院君は國政を王に返上して朝鮮の政情一變し王妃閔氏一族の執權時代となりました。閔氏はかねてより大院君と不和の間柄にありましたので、これより大院君の施いた方針は、ことゝ毎に改廢され、對外方針も緩和されて我が國との國交成立についても非公式交渉が開始されました。

たまたま明治八年(李太王十二年)九月我が軍艦雲揚が江華島沖を航行中、江華島草芝鎭の砲臺から砲火を受け雲揚は退いて永宗鎭に報復の砲撃を加へこれを占領した事件が起りましたのでこれを機として我が國は翌年二月黑田清隆井上馨を正副の特命全權辨理大臣として江華府に遣はし、ここに修好條規十一款は締結せられ、ついで八月修好條規附錄十一款、通商章程十一則も京城にて結ばれ、この約によつて先づ釜山港が開かれ十二年に元山港、十六年に仁川港は開かれました。所謂朝鮮の開港はこの條約の成つた年、卽ち李太



王十三年(西暦一八七六)に在り、これより歐米諸國もまた朝鮮と國交通商を開くを得るに至りました。

大院君隱退後の傾向が、右の如く開化發醒に趨かうとしたに對し、大院君一派は心平らかならず、十九年壬午(明治十五年)閔氏に怨みを持つものと結び、兵士を煽動して王宮を犯し、王妃以下閔氏一族を仆して政權を奪ひ、我が公使館を襲はしめました(壬午政變)。時に清國は朝鮮使臣の請ひによつて兵を出し、大院君を清國に押送して、兵を京城に駐在せしめ、我が國は新たに濟物浦條約を結んで、謝罪賠償させるとともに、また軍隊を京城に置くことになりました。

この頃より革新派と守舊派との對立は著しく、前者は青年政治家洪英植朴泳孝金玉均等を中心とし、後者は戚族閔趙兩氏を以て中心とします。二十一年甲申(明治十七年)革新派は我が國の援助を求めて反對派を仆し政權を握らうとして、遂に日清兩國兵の衝突となりました(甲申政變)。この問題は翌年、天津に於ける日清間の條約によつて解決され、兩國はともに京城から軍隊を撤



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

朝鮮史のしるべ

することとなりました。其後日清の衝突を再び誘導したものが、東學黨の亂です。

東學黨は慶尙北道慶州出身の崔濟愚なるものを教祖とする東學道に起原するもので、東學道は哲宗十一年(西暦一八六〇)濟愚が儒佛道三教の長をとつて一教としたもの當時邪學とされたキリスト教に對抗するを標榜してゐましたが、その徒はこれを政治問題に利用し、往往叛亂を企てるものもあり、頗る危險視されてゐました。李太王三十一年甲午(明治二十七年)全羅北道井邑郡に全琫準といふものが、地方官の失政を機として起ちますと、全羅南北道忠清南北道の東學の徒はこれに應じて、空前の大叛亂となりました。當時國政に當つてゐた閔氏はその鎭壓に苦しみ、清國の救援を求め、清國はこれに應じて兵を出すとともに、天津條約により、我が國に通告して來ましたので、我が國もまた出兵し、これが鎭定に當りました。

東學の亂は、朝鮮の政治の腐敗に原因するものに外なりませんから、その亂



が一先づ收まると、我が國は日清兩國の出兵を機會に、朝鮮の政治を改革し、この種の禍根を絶たうとし、これを朝鮮政府に勸告し、清國の協力を求めましたが、清國はこれに應じなかつたので、遂に兩國間に開戰を見るに至りました(日清戰役)。

山縣有朋を第一軍司令長官とする我が征清軍は、平壤を占領してゐた清軍を破つて、進んで鴨綠江を渡り、大山巖の第二軍は旅順口を陷れ、別に山東半島の威海衛を攻め、連戰連勝の勢でありましたので、清國は李鴻章を遣はして馬關(下關)に和を講ぜしめました(明治二十八年四月)。

この戰によつて朝鮮は事實上清國の羈絆を脫し、馬關條約によつてその確認を得、また戰のまだ終らないうちから、我が國の指導によつて官制百般の改革を行ひ、それは甲午改革(明治二十七年)として有名であります。改革の翌年(李太王三十三年)には建元して建陽元年といひ、その翌年には國號を改めて大韓帝國と稱しました。しかしこの間、內部の情狀は未だ必ずしも外形と一致

せず、改革を喜ばぬもの往往あり、閔氏の黨はこれに乘じて起ち、また政權を握つて反動的政策に出ました。これを利用して、新たに朝鮮に一大勢力を張らんとしたのがロシヤであります。

清國が我が國との戰に敗れてその內實を世界に暴露すると、ロシヤ・ドイツ・フランスは、先づ我が國の遼東半島占有を東洋平和に害ありとして、これを清國に還附するやう勸告し來り、我が國はやむを得ずこれを容れたのですが、三國はそれぞれこれを以つて恩を清國に賣り、就中ロシヤが明治三十一年、二十五年間租借の名を以つて旅順大連を取り、この地とシベリヤ鐵道とを連絡する鐵道の敷設權を得たことはそれが朝鮮の安危に關すること大なるはいふまでもありません。ここに我が國は、ロシヤと朝鮮に關する協商を行ひ、互に內政に干涉しないことを約しました。

明治三十三年、清國に於ける排外運動＝義和團の亂が起つたのを好機として、ロシヤは大兵を滿洲に入れ、亂の平定後もなほ撤兵せず、滿洲占領に異なら



ない狀態を示して、清國及び韓國に大なる脅威を加へ、更に兵を半島に進めましたので、我が國は韓國の保護のためロシヤに交涉しましたが、ロシヤは半島に對する欲望をすてず、且つ我が國の半島に於ける行動を抑へようとし益〻壓迫を加へましたので遂に我が國は明治三十七年二月、ロシヤに對して宣戰を布告しました。宣戰の詔勅に、

韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安否ノ繫ル所ナリ然ルニ若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムベカラズ

とあることは、開戰の最大目的とするところが那邊にあるかを明示されて居り、我我の深く省察すべき點であります。

## 二五、統監と總督政治

日露開戰とともに韓國は我が國と攻守同盟を結んで共同の敵に當ることとなり、我が軍の勝利重なるにつれて、その態度は愈ゝ固く、財政監督、外部顧問などのことについて協約を定め、我が國との關係は密著しました。

戰役は、陸に於ける奉天の大捷(明治三十八年三月十日)、海に於けるバルチック艦隊の撃滅(五月二十七日)を以て大勢を決定し、ポーツマスに於ける媾和條約の締結(九月五日)となりました。その第二條には、

ロシヤ帝國政府ハ日本ガ韓國ニ於テ政治上軍事上及經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ日本帝國政府ガ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導保護監理ノ措置ヲ執ルニ當リ之ヲ阻礙シ又ハ之ニ干渉セザルコトヲ約ス

とあり、我が多年の希望はここに漸く認められました。この條文によつて我が國は、同年十一月、韓國保護協約を結び、その外交を接收し、統監を京城に駐在せしめることとし、伊藤博文が初代統監に任命されました。明治四十年七月



李太王は位を太子(李王)に讓り、新王は我が國との協約を更に新たにして、統監は外交のみならず、内政に關しても、指導監督するに至りました。

然るに永年にわたる内政の紊亂は、これを收拾挽回するに容易でなく、民衆の安堵は、このままでは到底保し難いものあり、明治四十二年十月、伊藤統監のハルビンに於ける遭難、同十二月に於ける内閣總理大臣李完用の遭難あつた後も、一大革新の必要を痛感せしめました。ここに統監曾禰荒助に代つて新たに赴任した統監寺内正毅は、李總理大臣と交渉を重ね、兩國相互の幸福を增進し、東洋の平和を永久に確保せんがため、韓國を日本に併合すべきことが約せられ、明治四十三年八月二十二日、併合條約は調印を了しました。よつて我が明治天皇は、同月二十九日を以て、普く國民に諭し、且つ併合のことを關係列國に通知し、韓國を改めて朝鮮とし、九月三十日、朝鮮總督府官制は公布せられ、十月一日、初代總督として寺内正毅が任命せられ、ここに總督政治はその第一歩をふみ出だしたのであります。

## 二五　統監と總督政治

爾來歳を經ること二十七年總督の代はうつること七たび總督政治は創業守成の兩期を經て建設期に及んで居り半島の山川はその人文の開化とともに全く面目を改め、しかも前途なほ洋洋たるものを認ることが出來朝鮮の開發はむしろこれからだといふ感を深くするのであります。

以上二十五節にわたつて申し述べ來つたところをここに回顧しますと、半島の歴史は漢の樂浪郡設置以降を數へても二千年に及び、その間の推移は實に複雜を極めて居ります。就中その歴史を色どつてあざやかなのは、北方滿洲に統一的勢力の出來上つてよりは、滿洲と支那本部と、南北對立の形勢を左右する力がおのづから半島に認められたことであります。わけても滿洲に興つた諸國は直接領土を半島に接しましたので、その南下に當つては、先づも つて武力を以て半島の向背を問ふことを常とし、半島の蒙つた災禍の最も直接的なものはこれでありました。然し今や新興滿洲國と我が朝鮮とは鮮滿



一如の言葉の通り、密接不離の關係に在り、形勢は昔日と一轉一換致しましたこの點は現在の朝鮮を認識するに當つての根本的要件でありませう。

次に半島から考へてみれば、陸路は遼東を經て北支那に通じ、海路は東支那海を航して山東半島また南支那に達し、支那文化の輸入には極めて有利な位地にあります。これは一見惠まれて居る如くでありながら、しかも文化の發達には却つて障害多いことであつて、新らしき刺戟による新らしき文化の成熟しないうちに、また次の刺戟が來ては、半島の文化そのものの滿足なる成育は期し難いこと申すまでもありません。政治上たえず何れかの國の正朔を奉じなければならなかつたやうに、文化の上でも、次次にその母體をかへて行きました。故に文化の變遷は屢〻あつたにもかかはらず、一つのものの繼續した發展展開は困難であつたのです。

第三に我が國の立場から顧みますと、我が國の支那交通廣く大陸發展は、多く半島を經由して行はれんとし、又た行はれました。同時に大陸文化は、時に





アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

朝鮮史のしるべ

半島を經て輸入傳來しました。この點に關して半島の演じた役割は古く且つ大きかつたとせねばなりません。

けれども東洋が東洋だけで生活する時代が終つて、所謂世界時代となつて約百年、我が日本が東洋の盟主としての責務を負ふに至つた今日では、政治・文化あらゆる關係は一變しました。この時に當つて半島が我が領土の一部となつて、その高度なる治安のもとに、民衆は生を安んじ、東西の要素を融合大成した我が文化の恩澤に直接に浴することが出來るに至つたことは、單に東洋のみならず、世界平和のために祝福すべきことであります。(完)



# 參考書目

朝鮮總督府刊　朝鮮史　第一編(新羅一統以前)(一—三)

同　朝鮮史　第二編(新羅一統時代)(一)

同　朝鮮史　第三編(高麗時代)(一—七)

同　朝鮮史　第四編(朝鮮前期)(一—一〇)

同　朝鮮史　第五編(朝鮮中期)(一—一〇)

同　朝鮮史　第六編(朝鮮後期)(一—四)

朴泰輔著　朝鮮通史(一冊)

今西龍著　朝鮮史の栞(一冊)

同　新羅史研究(一冊)

同　百濟史研究(一冊)



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

# 索引

ア
淺野長慶 一三七
足利義政 一〇〇
足利義滿 九九
阿倍朝臣繼麻呂 五四
鴉片戰爭 一四六
アメリカ 一四七
安鼎福(順庵) 一四五

イ
威化島 九四
威海衞 一五一
乙巳の士禍 一三一
井上馨 一四八
伊藤博文 一五四
尹瓘九城の役 七四・九七
尹元衡 一二〇
尹任 一二〇
印刷術 一〇八

ウ
宇喜多秀家 一二五
蔚山籠城 一二八
雲揚號事件 一四八

エ
永興 九六
永正條約 一〇一
永樂元年 三一
永樂好太王陵碑 三一
衞氏の朝鮮 六
衞滿 六
英祖(李朝) 一四一
睿宗(李朝) 一一八
燕山君 一一九
濊貊 一〇一

オ
兀良哈(オランカイ) 一三六
織田信長 一三五
王建 六一・六五



朝鮮史のしるべ

稻葉岩吉著 朝鮮史(世界歴史大系第十一卷)(一册)
同 增訂滿洲發達史 (一册)
小田省吾著 朝鮮小史 (一册)
白鳥清編 東洋史概說 (一册)
池內宏著 元寇の新研究 (二册)
幣原坦著 朝鮮史話 (一册)
藤田亮策著 朝鮮古代文化(岩波講座日本歴史)
稻葉岩吉著 日鮮關係(同上)
中村榮孝著 室町時代の日鮮關係(同上)
同 文祿慶長の役(同上)
同 江戸時代の日鮮關係(同上)
田保橋潔著 明治外交史(同上)

王險城　二
大山巖　一五一
諺文の創製　一〇八


## カ

加藤清正　一三五
嘉吉條約　一〇一
嘉慶帝　一四三
濊　七
濊種族　一六
濊君南閭　七
海印寺　六一・八三
開京　六四
開平（元の上都）　九四
海寇　九三
海寇對策　九九
懐風藻　三四
革新派　一四九
合浦（馬山）　八八
鎌倉幕府　八八
伽耶山海印寺　六一
韓亭（カラノトマリ）　五四
韓王　一五
韓地　一五
韓種族　一五
韓國統監　一五四
韓國保護協約　一五四
韓明澮　一一九
漢城　五四
漢の武帝　三・一一
丸都　三四
丸都城　三三


## キ

己酉約條　一三三
己卯の士禍　一三〇
癸亥約條　一〇一
箕子　六
箕氏の朝鮮　六
鬼室福信　四九
義慈王　四八
義天　七五
義和團　一五三
吉再（冶隱）　一一九
契丹　六四・七一
弓裔　六一
弓福　五九
牛米推氏　七六
姜弘立　一五六
恭讓王　九五
恭愍王　九三
キリスト教　一四三




忻都　八八
金州（金海）客館　八六
金石併用時代　一〇
金の建國　七四
金玉均　一四九
金景瑞　一三六
金叢昌　五九
金孝元　一二一
金宏弼　一一九
金淑滋　一一七
金馹孫　一一九
金正喜（秋史・阮堂）　一四三
金宗瑞　一一八
金傳　六三


## ク

久麻那利（熊津）　三四
黒田清隆　一四八
黒田長政　一三五
訓民正音　一〇八


## ケ

景宗（李朝）　一四一
景福宮　九五・一四六
奎章閣　一四四
經國大典　一〇七
經濟六典　一〇七
桂苑筆耕　六一
慶源李氏　七七
慶長役の兵船數　一三七
慶長條約　一三三
闕史時代　二一・六八
建州衛女眞　一三一
乾隆時代　一四二
玄菟郡の位地　三一
元（蒙古）　八四
元山の開港　一四八


## コ

己汶　三五
小西飛驒守　一二八
小西行長　一三五
小早川隆春　一二七
古代の鮮満交通路　九
古朝鮮時代　二・六
五山の僧侶　一〇〇
呉越　六二・六七
呉の孫權　一三五
後漢書濊國志　一三一
公孫氏　一二〇・一三五
好太王　三一

好太王碑　五二
光海君　一三五
甲午改革　一五一
甲子の士禍　一三〇
甲申政變　一四九
江華島　八〇・一三六
江都時代　八〇・八三
江東城　七九
江南軍　八九
江寧君綱　九四
弘安役の兵船數　八九
弘齋全書　一四四
考證學　一四五
洪英植　一四九
洪茶丘　八八
康熙時代　一四三
高句麗　四
高句麗と突厥　四四
高句麗遺民の反亂　五二
高麗史　一〇五
高麗史節要　一〇五
高麗時代　四
高麗の建國　六五
高麗の十道　六九
高麗の五道兩界　六九
高麗の長城　七二
高麗の大藏經　七二
興京　一二九・一三五
黃草嶺碑　三九
皇甫仁　一一八
後殷王　九四
後金國　一三六
後三國時代　六二
國內城　一三四
高句麗の發祥　三
高句麗の五族・五部　五五
國姓爺　一三七


サ


西鄕隆盛　一四八
崔瑀(怡)　七八
崔瑄　八二
崔瑩　九四
崔沆　八二
崔濟愚　一四〇
崔永老　六九
崔怡　七八
崔坦　八七
崔致遠　七〇
崔忠獻　七六
齊國大長公主　六〇





濟物浦條約　一四九
薩爾滸山　一三六
三韓時代　五
三國史記　一〇四
三國時代　四・四〇
三色　一二一
三田渡　一二七
三浦　一〇〇


シ


士禍時代　一二一
史庫　一〇四
四郡(李朝の)　九九
四郡の位(漢の)　一三
四庫全書　一四四
四行使節　一三六
四色　一三九
泗川の戰　一二〇
泗沘　五四
嗣齋派　一三〇
慈悲嶺　八七
事大政策　九五
式古天地盤　一八
七年戰役　一三二
實錄　一〇四
シベリヤ鐵道　一三三
シャーマン號　一四七
守舊派　一四九
朱元璋　九五
朱子學　一二四
首陽大君　一二八
修好使節　一三三
修好條規　一四八
周文謨　一四五
脩彥規　六七
斜安縣　一三
肅宗(李朝)　一四一
純祖　一四六
順和君　一三五
庶孽　一四三
女眞(金)　六四
女・眞　七五・九七
昌寧の拓境碑　三六
徐理修　一四四
辰王　一五
辰韓　三・一五
辰韓の鐵　一六
眞興王　三六
眞興王巡狩碑　三九
眞番　七
眞番郡の位地　一一
瀋陽(奉天)　一三六

晋書地理志　一五
觀堂　六〇
沈惟敬　一三七
沈義謙　一一二
辛旽　九四
親元派　九四
親明派　九四
適來船　八六
新羅　四・二八・四〇
新羅一統時代　四・五二
新羅の建國　二八
新羅の九州　三六
新羅の六部　四一
新羅の終り　六三
新羅征伐の計畫　三五
新編諸宗教藏總錄　七三
清への歳幣　一五八
神功皇后　一三七
仁川の開港　一四八
仁祖　一三五
仁宗(李朝)　一一九
壬午政變　一四九
壬申約條　一〇一
壬辰の役　一三五

ス

隋の文帝　四五
隋の煬帝　四五
崇禎紀年　一五九

セ

西京　六四
西京遷都運動　七六
西人　一三
西生浦　一二七
西洋學術　一四三
成三問　一一八
成宗(高麗)　六七
成宗(李朝)　一一八
世祖(李朝)　一一八
世宗　九九・一〇五
世宗實錄地理志　一〇六
正祖　一四一
請政進調使　五三
聖明王　三九
征韓論　一四八
清海鎭　三九
戚家世道　一四六
世道政治　一四六
石器時代　八
泉蓋蘇文　四七・五〇



戰國時代　一三五
宣祖　一三一
前漢書地理志　一五
前廢王　九四
全琫準　一五〇
善山　一一九

ソ

祖承訓　一三七
蘇定方　四八
曾禰荒助　一五六
滄海郡　七・一一
宗氏　一三四
宋應昌　一三七
宋時烈(尤庵)　一四一
曹敏修　九四
雙冀　七七

タ

大院君　一四六
大覺國師(義天)　七二
大藏經　七三・八三・一〇〇
太宗(李朝)　一一八
帶沙　五五
帶方郡の戸數　一二三
帶方縣　一四
泰封國　六〇
拷ふすま新羅　五四
達魯花赤　七九
端宗　一一八

チ

中人階級　一四三
中宗　一二〇
忠惠王　七〇
中肅王　七〇
忠宣王　七〇
忠烈王　七〇
長安國　三九
長壽王　五四
朝鮮總督府　一五五
張統　一四
張寶高　三九
趙泰　八四
趙光祖　一二〇
成吉思汗　七八

ツ

通溝平野　三三
通商章程　一四八
通信使　一五五

テ

丁若鏞　一四
丁卯の亂　一五六
定昌君璘　九三
定宗　一一八
定平　九七
鄭成功　一三七
鄭仲夫　七六
鄭道傳　一一六
鄭夢周(圃隱)　九三
鐵嶺　九七
寺內正毅　一五五
天冠山　八八
天津條約　一四九
都房政治　七八
ドイツ　一三二
冬至使行　一五六
東學黨　一四〇
東國輿地勝覽　一〇六
東眞國　七九
東人　一三一
東寧府　八〇
東寧路摠管府　八〇
東路軍　八九
唐と新羅の交戰　五三
唐の高宗　四八
唐の太宗　四六
黨論の前驅　一一七
銅活字　一〇八
豐臣秀吉　一三三

ナ

名護屋　一四
乃而浦(薺浦)　一〇〇
內藤如安　一二八
長屋王　四四
南漢山城　一三七
南京條約　一四六
南人　一三三・一四一

ヌ

奴兒哈赤　一四〇・一五五

ネ

寧越　一一八

ハ

馬韓　三・一六
博多の津　八五
白村口　四九
貊　七
八道總略　一二三
ハルビン　一五五
バルチック艦隊　一四
萬卷堂　一〇二

ヒ

卑彌呼　一九
百濟　四・一八
百濟の建國　二六
百濟の南遷　二四
百濟の五部・五方　二三
百濟の滅亡　四八
百濟の復興運動　四九
百濟(百済)　二三
閔氏　一五一
閔氏の執權　一〇八

フ

富山浦　一〇〇
釜山の開港　一〇八
符仁寺　八二
駙馬王　九〇
忽必烈　八五
フランス　一四七・一五三
フランス人宣教師　一四五
毋丘儉　三三
武臣の擡頭　七六
佛教の傳來　四三
佛教(高麗の)　一一一
佛教(李朝の)　一一三
文運振興期　一四一
文永役の兵船數　八八
文公家禮　一一三
文宗(高麗)　七三
文武王　五三
文祿役の兵船數　一二四

ヘ

平壤　一五一
平壤遷都　三四
平壤城陷落　五〇
平百濟塔碑　四八
併合條約　一五五
碧蹄館　一二七
遍照　六四
邊山　八八
弁韓　三・一五

弁韓と我が國　二〇

ホ

蒲鮮萬奴　九九
戊午の士禍　一二〇
慕容氏　二七
芳遠　一一八
芳果　一一八
芳碩　一一八
豐璋　四九
鮑石亭　六二
ポーツマス條約　一四四
奉天の大捷　一五五
法興王　四六
朋黨の八大因　一三三
坊の津　八五
北漢山碑　三九
北元　九五
北條時宗　八八
北人　三一
朴泳孝　一四九
朴巖　一〇七
朴齊家　一四四
朴彭年　一一八
渤海國　五五・七〇

マ

磨雲嶺碑　三九
摩震國　六二
萬葉集　五四
滿浦鎮　二三

ミ

任那　二〇
任那の滅亡　四六
任那日本府　四六
妙淸　七六
明の建國　九五

ム

室町幕府　九六

メ

明治維新　一四七

モ

蒙古　六四・七六
蒙古的風俗　八〇
毛利秀元　一四〇

ヤ



山縣有朋　一五一
耶律阿保機　七四

ユ

熊津　四四

ヨ

沃沮種族　一六
雍正帝　一四三
洋夷侵犯の碑　一四七

ラ

樂浪郡時代　二・七
樂浪郡の位地　一一
樂浪郡の戸口數　一三
樂浪帶方時代　一五
樂浪郡の最後　二四

リ

李家煥　一四四
李昰應　一四六
李完用　一五五
李滉（退溪）　一二二
李鴻章　一五一
李子淵　七五
李子春　九六
李資謙　七五
李珥（栗谷）　一二一
李如松　一二七
李舜臣　一二六
李成桂　九四
李太王　一五五
李德懋　一四四
李朝時代　四
李朝實錄　一〇四
李朝の八道　一〇六
吏曹銓郎　一三一
理學派　一三〇
臨海君　一二五
臨屯　七
臨屯郡の位地　一一
柳得恭　一四三
旅順口　一五一
遼東還附　一五三
遼東都指揮使司　九四
遼陽　一三六
梁吉　六二

レ

禮成江　六四

# 對照年表

| 紀元 | 日本 | 朝鮮 | 支那 | 西歴 |
|---|---|---|---|---|
| | | | | |

# 對照年表

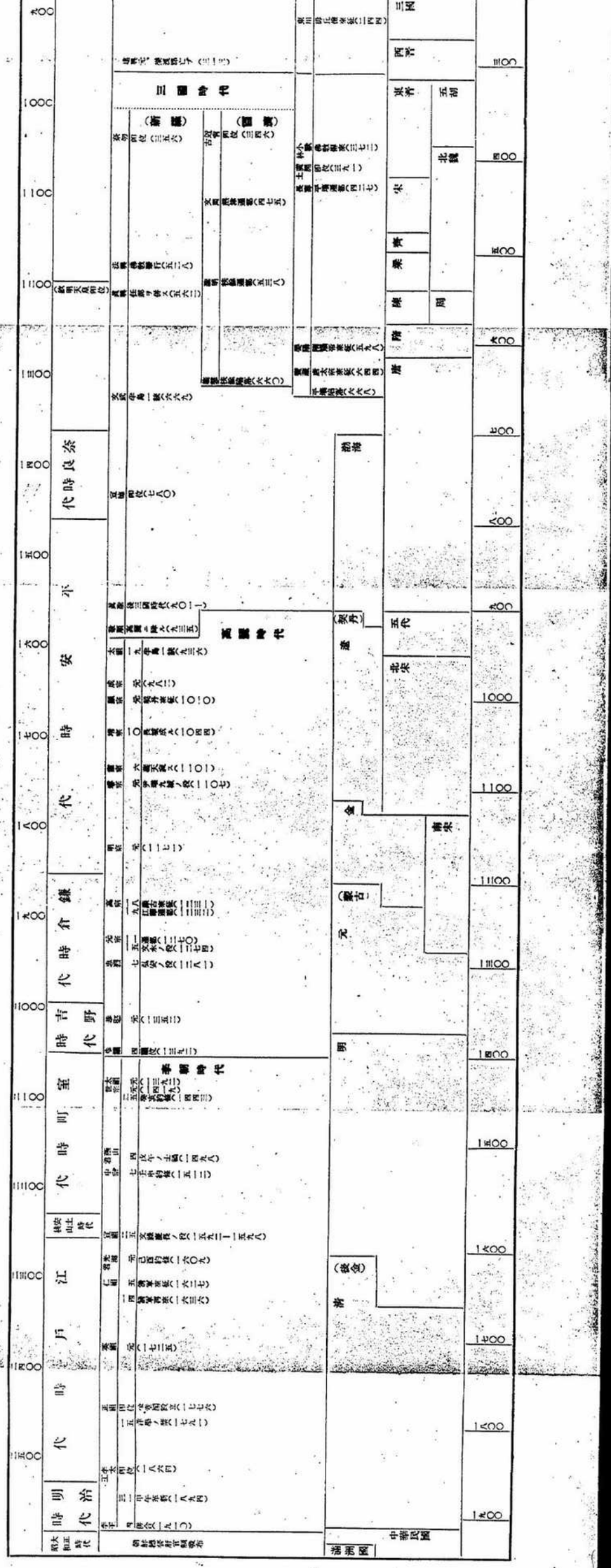
**紀元**：四〇〇　五〇〇　六〇〇　七〇〇　八〇〇　九〇〇　一〇〇〇　一一〇〇　一二〇〇　一三〇〇　一四〇〇　一五〇〇　一六〇〇　一七〇〇　一八〇〇　一九〇〇　二〇〇〇　二一〇〇

**日本**
- (孝靈天皇即位)
- (崇神天皇即位)
- (仲哀天皇即位)
- (欽明天皇即位)
- 奈良時代
- 平安時代
- 鎌倉時代
- 吉野時代
- 室町

**朝鮮**
- 古朝鮮時代
  - 箕準亡命（前一九五頃）
  - 元朔元、滄海郡（前一二八－一二六）
- 樂浪三韓時代
  - 元封三、四郡設置（前一〇八）
  - 始元五、眞番・臨屯二郡ヲ罷ム（前八二）
  - 建安年中、帶方郡ヲ置ク（二〇五頃）
  - 建興元、樂浪郡亡ブ（三一三）
- 三國時代
  - （新羅）
    - 奈勿 即位（三五六）
    - 法興 佛教施行（五二八）
    - 眞興 任那ヲ併ス（五六二）
    - 文武 半島一統（六六九）
    - 宣德 即位（七八〇）
    - 眞聖 後三國時代（九〇一）
    - 敬順 高麗ニ降ル（九三五）
  - （百濟）
    - 近肖古 即位（三四六）
    - 文周 熊津遷都（四七五）
    - 聖明 扶餘遷都（五三八）
    - 義慈 扶餘陥落（六六〇）
  - （高句麗）
    - 東川 毋丘儉來征（二四四）
    - 小獸林 佛教傳來（三七二）
    - 廣開土 即位（三九一）
    - 長壽 平壤遷都（四二七）
    - 嬰陽 隋煬帝來征（五九八）
    - 寶藏 唐太宗來征（六四四）
    - 平壤陥落（六六八）
- 高麗時代
  - 太祖 一九 半島一統（九三六）
  - 成宗 元（九八二）
  - 顯宗 元 契丹來征（一〇一〇）
  - 靖宗 一〇 長城成ル（一〇四四）
  - 肅宗 六 義天寂ス（一一〇一）
  - 睿宗 元 尹瓘九城ノ役（一一〇七）
  - 明宗 元（一一七一）
  - 高宗 一八 蒙古來征（一二三一）
  - 高宗 一九 江華遷都（一二三二）
  - 元宗 一一 還都（一二七〇）
  - 元宗 一五 文永ノ役（一二七四）
  - 忠烈 七 弘安ノ役（一二八一）
  - 恭愍 元（一三五二）
  - 辛禑 四 [illegible]（一三[illegible]）
- 李朝時代
  - 太祖 元（一三九二）
  - 世宗 元（一四一九）
  - 世宗 二五 癸亥約條（一四四三）

**支那**
- 周
- 秦
- 前漢
- 新
- 後漢
- 三國
- 西晋
- 東晋
- 五胡
- 宋
- 齊
- 梁
- 陳
- 北魏
- 周
- 隋
- 唐
- 渤海
- 五代
- （契丹）遼
- 北宋
- 金
- 南宋
- （蒙古）元
- 明

**西曆**：前二〇〇　前一〇〇　西曆前　西曆後　一〇〇　二〇〇　三〇〇　四〇〇　五〇〇　六〇〇　七〇〇　八〇〇　九〇〇　一〇〇〇　一一〇〇　一二〇〇　一三〇〇　一四〇〇

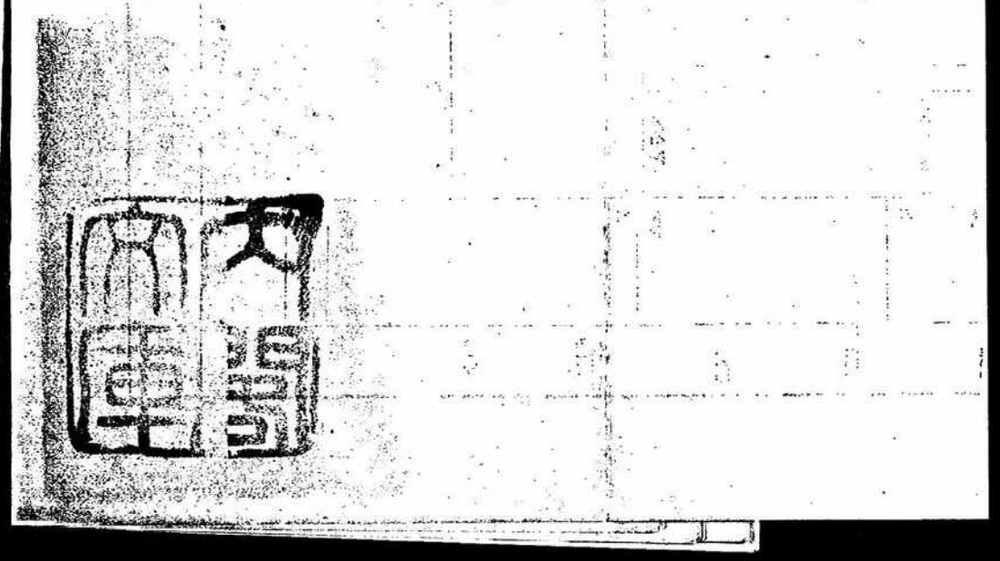

明治時代
大和朝廷時代
平安時代
鎌倉時代
室町時代
戸江時代
桃山時代
江戸時代
明治時代
大正時代
(鎌倉)
(室町)
(桃山)
(江戸)
(明治)
(大正)
(現今)
(後金)
(新)
(東方)
(西方)
(北朝)
(南朝)
(五胡)
(北魏)
(五代)
(北宋)
(南宋)
(金)
(元)
(明)
(清)
(隋)
(唐)
(宋)
(遼)
(西夏)
(三国)
(晉)
(魏)
(蜀)
(呉)
(秦)
(漢)
(周)
(陳)
(梁)
(斉)
(宋)
(東晉)
(南北朝)
(中華民國)
(滿洲國)

昭和十二年三月二十八日印刷
昭和十二年三月三十一日發行
昭和十四年八月三十日三版

朝鮮總督府

京城府蓬萊町三丁目六二
印刷所　朝鮮印刷株式會社

（定價　五十錢）



庫文閲内
書和
六五三四號
一冊
函
架

15204

221
25

中樞院調査課編

内鮮一體
懷古資料

# 朝鮮の國名に因める名詞考

朝鮮總督府中樞院

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

# 内一

# 鮮典體

皇紀二千六百年
二月十日

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

# 序

本院調査課に於て這回『内鮮一體懐古資料朝鮮の國名に因める名詞考』なる一書を刊行に附した。

本書は本院囑託今村鞆氏の執筆に係り、其内容は書名の示す如く古代より德川時代迄の間に於てカラ・ミマナ・クダラ・シラキ・コマ・カウライ・テウセン等半島の國名ある名詞計四百十有七許を詮索蒐集して考證したるもので、編者の主旨は、内鮮關係特に其文化のつながり血脈の交流が今人の豫想外に古く深く繁かりしを曉るべく資料の一斑を提供するに存ずるものである。今や半島の同胞は奮然起ちて皇國臣民たる自覺の下に興亞大業の鴻謨を奉戴し盡忠報國の赤誠を披瀝して活躍しつゝある。一方志願兵制度の實行、氏の創設等も施行せられ桑槿一域渾然融合に向つて更に拍車を推すの秋に方

り、本書の如きは內鮮一體の思想に有力なる一根據を加ふるものと謂ふべく時機投合の著述たるを失はざるものと信ずる。

茲に著者の勞を多とし本書の一讀を推奬するものである。

昭和十五年一月

中樞院書記官長　大竹十郎

# 例言

古代より日本と雞林半島との間に人文上密邇の關聯ありしことは、古史に照して是を窺知し得るは無論、猶ほ考古學上より觀たる先史時代以降の出土品並遺物等に依るも、神話傳說に考するも、言語學上より觀て其風俗が一致せるものの多くあることに徵するも、民俗學上より觀て其風俗が一致せるものある點に察するときは更に一段と所謂內鮮一體の實ありしこと、今日吾人が考ふる以上なりしことの考證の論據を得るのである。隨つて其緣由により昔より日本に於けるモノの名に雞林半島の國名に因めるものが甚だ多數に上つて居るが、其割合に世人に知られて居ない。今茲にそれ等のものを收拾列錄して內鮮のツナガリの甚だ古く且つ繁かりしことを追懷する資料の一とし內鮮一體の觀念に更に一の根據を與へんとするもの

である。以上が此の小册子を著はした所以である。

昭和十五年一月

中樞院囑託　今村鞆識す



# 目錄


第一章　總說……一頁

一　カラ　辛　加羅　韓……二

二　任那……三

三　高麗　狛　胡麻……四

四　新羅　志良木……五

五　百濟　久多良……六

六　朝鮮……六

第二章　神社……八

(1)　韓神社……九

(2)　韓國伊太氐神社……一〇

(3)　韓槌神社……二

(4)　韓國宇豆毘神社……二